

Title	安井家の蔵書について：安井文庫研究之二
Sub Title	Yasui bunko studies (2) : study of the Yasui family library collection
Author	高橋, 智(Takahashi, Satoshi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2000
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.35 (2000. ) ,p.189- 257
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000035-0189">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000035-0189</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

\*注記・論文中の写真について転載する場合は斯道文庫にお問い合わせ下さい。

## 安井家の蔵書について——安井文庫研究之二——

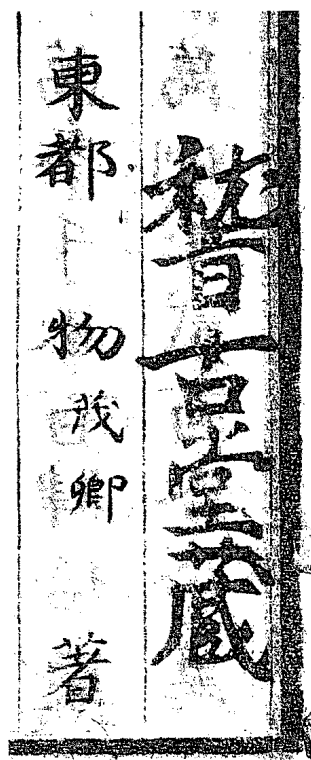
高橋 智

まえがき

本論集第三十三輯にひき続き、ここに「安井家の蔵書について」と題して安井文庫を解説する。およそ歴史上における学者の旧蔵書や遺稿の総体を復元するという試みは、その学者を研究する為の参考に資するものというだけではなく、書物と社会や人との関わり、書物の成立や流伝など、さまざまな方面にむけての、理解と感動を人々に与えてくれる。とはいえ、その蔵書も、分散されて遺る、或いは殆どが烏有に帰する場合が多いなかで、この安井文庫のごとく整然と今日にはほぼ全貌が伝えられている例は稀有に属する。文庫の中には、宮崎—東京—福岡—東京と長い旅を重ねて今に至っているものもある。遠く清朝から贈られてきた書物もある。先祖何代にも亘って用いられてきたものもある。そのひとつひとつに刻まれた縁えはしは、学問の世界に大きな意味をもたらしたものは言うまでもなく、ほんの些細なものに至るまで、けして看過してはならないものばかりであると感ずるのである。安井文庫の実情は息軒の旧蔵よりも朴堂の蒐集に係るものが大半で、経学はもとより、日本儒学・明治漢詩文の分野に特徴的な質を誇る。その全体像は「安井文庫目録」として近く公刊の予定であるが、今ここでは朴堂の早期以前の旧蔵について、整理を加え吟味するのが目的である。これをもって、安井文庫の理解を一層深めていただければ幸甚である。なお、安井家に関して参考すべき文献などは本論集第三十三輯を参照いただきたい。また、目録・解説に亘って、多々不備もあろうが、ご叱正を請う次第である。

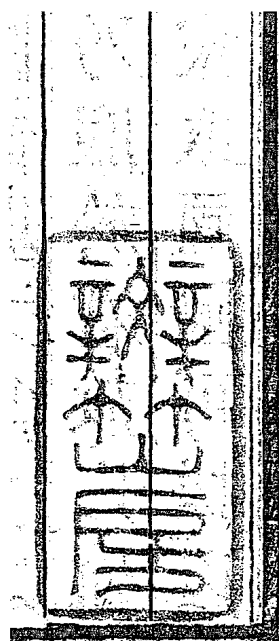
安井家蔵書印

安井滄洲蔵書印

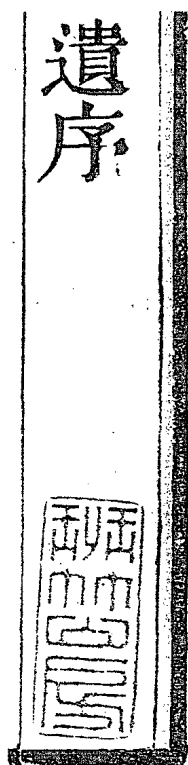


安井息軒蔵書印

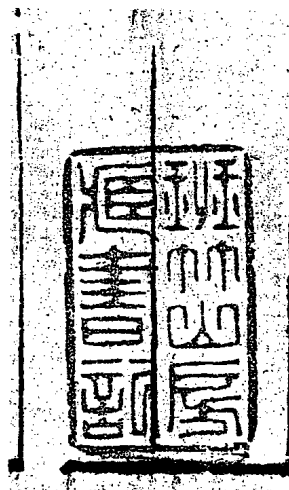
(イ) 目録の函架番号の上に「大」と著録するもの



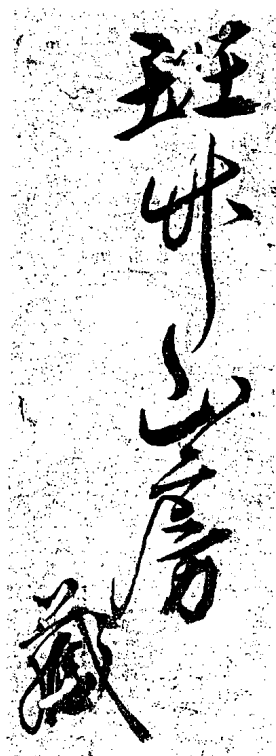
(ロ) 同様に「小」と著録する



(ハ) 同様に「蔵」と著録する



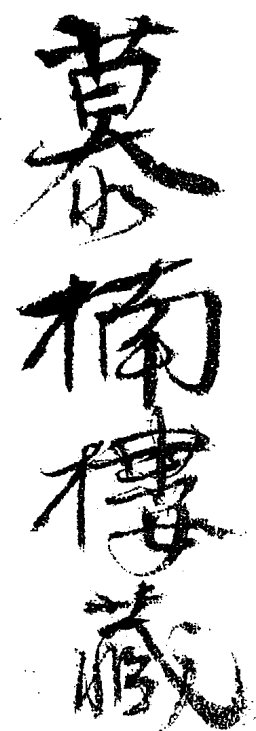
(ホ) 目録に「班墨」と著録、印記ではなく墨書である



(ニ) 「十七史」北齊書のみにみえる



(ヘ) 息軒長男棟蔵の墨書、「慕」と著録

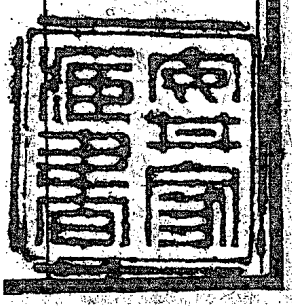


安井朴堂蔵書印

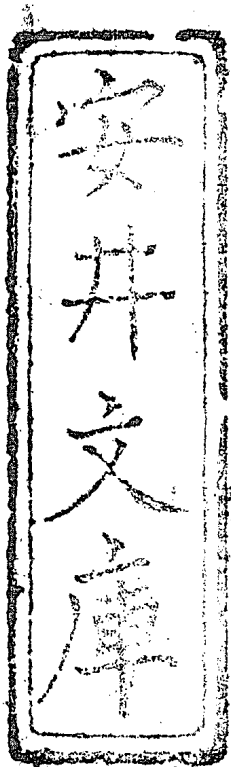
(イ) 目録に「翠」と著録（「翠紅園安井氏蔵書記」）



(ロ) 同様に「安家」と著録する



(ハ) 貴重なもののみに捺す。滄洲・息軒のものには全て捺して  
いる



目次

頁

目録編

安井滄洲旧蔵書……………一五九  
 安井息軒旧蔵書・抜抄本・自著稿本……………一六四  
 安井朴堂早年蔵書……………二〇〇

解説編

第一章 安井家の蔵書構成……………二〇二  
 第二章 滄洲の蔵書……………二〇四  
 第三章 息軒の蔵書

第一節 蔵書

第一項 唐本の購入……………二〇八  
 第二項 昌平校・天保年間の読書・附録……………二一六  
 第三項 和刻本への書き入れ……………二二三  
 第四項 師友と蔵書……………二三〇

第二節 著書

第一項 書経……………二三五  
 第二項 詩経……………二三七  
 第三項 礼……………二四〇

第四項 春秋左氏伝……………二四二  
 第五項 四書……………二四四  
 第六項 戦国策……………二四九  
 第七項 管子……………二四九  
 第八項 旅行記……………二五一  
 第九項 随筆……………二五三  
 第十項 その他……………二五四  
 附録 班竹山房蔵書目録翻刻(待統)  
 第四章 朴堂の蔵書(待統)

目錄編

安井滄洲旧蔵書

社倉私議 中井竹山(積善)撰 安井滄洲抄録 一冊

鳩巢小説附丘原平山氏鳩巢小説評論 室鳩巢(直清)撰 江戸写 09B 5 23

徂徠集三十卷補遺一卷 荻生徂徠(双松)撰 江戸刊寛政三年印(南紀、无尤堂・大阪、文金堂)十九冊 22B c 2

度量衡考 荻生徂徠(双松)・北溪(觀)撰 享保十九年刊(江戸、中村新七等)二冊 22G a 6

古文尚書標注 漢孔安国伝 宇野東山(成之)標注 天明三年刊(京都、田中市兵衛等)六冊 09B 2 3

詩経説約二十八卷 明顧夢麟撰 楊彝參訂 江戸刊 五冊 09B 2 3

存卷一、四、七、十二 漢毛亨伝 鄭玄箋明金蟠訂 宇野東山(成之)標注 天明六年刊 09B 2 4

(江戸、前川六左衛門)九冊

左伝附注五卷後録一卷 明陸燾撰 奥村春猷校 寛政十一年刊(求古館蔵版)三冊 25A e-3 2

孝経 題孔安国伝 太宰春台(純)音校 寛政六年刊(江戸、崇山房 小林新兵衛)一冊 09B 2 11

国語二十一卷附札記 吳韋昭注 清黄丕烈札記 文化一年刊(江戸、葛氏上善堂蔵版)六冊 09B 2 13

荀子二十卷 唐楊倞注 葛西応禎校 延享二年刊(京都、葛西市郎兵衛)十冊 班墨 25C a-1 3

評苑文選傍訓大全十五卷 梁蕭統輯 明王象乾刪訂 元禄十三年刊(京都、風月勝左衛門)五冊 班墨 38A 3 15

賈浪仙長江集十卷 唐賈島撰 正徳五年刊(京都、茨城欠卷一、三) 多左衛門)二冊 38A 4 2

杜詩偶評四卷 唐杜甫撰 清沈德潜編 享和三年刊 三冊 38A 4 17

安井息軒旧蔵書

平津館叢書 清孫星衍輯 清嘉慶間蘭陵孫氏刊 四十七冊

欠琴操二卷・穆天子伝六卷（第七册）

大09B 5 2

太平御覽一千卷目錄十五卷・經史圖書綱目・総類・

挙論・覆校挙論

宋李昉等奉勅撰 田口文史・喜多邨直寛校 安政二年（文久一年刊）（江

戸、喜多邨氏学訓堂）木活字印 一百五十三册

大04B 2

集古帖五卷続帖二卷

北條水齋（鉉）審定 寛政五（七）年刊（模刻）七帖

小09 6 8

文苑遺談三卷続集一卷

青山拙齋（延子）撰 江戸刊（水戸、鉄槍齋）木活字印 四册

小21F 5 1

七経孟子考文補遺二百卷

山井崑崙（鼎）撰 荻生徂徠（双松）補遺 清嘉慶二年儀

微阮氏小琅僊館刊 二十四册

小22A 4 1

大学章句講本

砂川由信撰 嘉永七年刊後修（砂川氏温故齋藏版）一册

小22A f 4

大学序次考異

砂川由信撰 天保十二年刊後修（砂川氏温故齋藏版）一册

小22A f 5

游東陬録（慊堂文鈔）

松崎慊堂（復）撰 江戸刊（掛川、徳造書院）二册

小22I a 3

新加九経字様（鉤摹石本九経字様）

唐玄度撰 松崎慊堂（復）校

天保十五年刊 一册

小22I a 4

五経文字三卷（鉤摹石本五経文字）

唐張參撰 松崎慊堂（復）校

天保間刊 三册

小22I a 5

爾雅三卷音釈三卷校譌一卷

晋郭璞注 闕名音釈 松崎慊堂（復）校 天保十

五年刊（羽沢、石経山房）一册

翻宋刊本 安小22I a 6

陶淵明文集八卷三謝詩一卷

東晋陶潜撰 劉宋謝靈雲・謝惠連・謝玄暉撰 松

崎慊堂（復）校 天保十一年刊（羽沢、石経山房）三册

縮臨宋治平刊本

大22I a 7

宕陰存稿十三卷補遺一卷

塩谷宕陰（世弘）撰 明治三年刊（塩谷氏晚香廬藏版）

六册

蔵22K 2 22

格物弁義二卷

砂川由信撰 嘉永間刊（砂川氏温故齋藏版）一册

小22K 2 27

璜川呉氏経学叢書

清呉志忠等輯 清嘉慶間刊 道光十

欠左伝杜解補正三卷（清顧炎武）

小25A 2 1

十三経注疏三百二十四卷

明毛晋校 清嘉慶三年金閶書業堂刊 一百二十册 覆刻汲

古閣刊本

大09B 2 1

皇清経解一千四百卷

清阮元輯 清道光九年広東学海堂刊初印 三百六十册

大09B 5 1

書蔡氏集伝輯録纂注六卷首一卷

元董鼎撰 清納蘭成徳校文化十一年刊

五册 官板

小09B 2 2

周礼四十二卷

漢鄭玄注 明金蟠等訂 寛延二年刊（京都、植村藤右衛門）七册 覆刻明永懷堂刊本



儀礼十七卷

漢鄭玄注 河野恕齋(子龍)校 宝曆十三年刊(京都、山田三良兵衛・山本平左衛門)

小 09B 2 6

五冊

儀礼章句十七卷

清吳廷華撰 清嘉慶三年同人堂刊 六冊

小 09B 2 8

論語集解義疏十卷

魏何晏集解 梁皇侃義疏 根本武夷(遜志)校 寬延三年刊(江戸、藤)

小 09B 2 9

木久市等)十冊

十七史一千五百七十四卷

明毛晉編 明崇禎一、十七年毛氏汲古閣刊 三百十五冊

欠史記一百三十卷・唐書二百二十五卷

小 09B 5 4~19

唐書二百二十五卷 積音二十五卷

宋歐陽修・宋祁等撰 宋董衝積音・明成化十八・嘉靖八、十、三十七年南京國子監刊明清通修 四十四冊

藏 09B 5 18

逸周書十卷

晉孔晁注 清盧文弨校 天保二年刊(彦根藩弘道館)木活字印 三冊

小 25B 4 1

戦国策譚概十卷

宋鮑彪注 元吳師道重校 明張文耀校輯 江戸刊後修(京都、積文堂・大坂、積玉)

大 09B 2 14

圃)八冊

欠卷一、三

弘簡録二百五十四卷

明邵經邦編 清邵遠平校 清刊 八十冊

続弘簡録元史類編四十二卷

清邵遠平撰 清継善堂刊 二十冊

藏 09B 5 20

劉向說苑纂注二十卷

漢劉向撰 明程榮校 関元洲(嘉)纂注 寛政六年刊(興藝館藏版)

六冊

藏 09B 2 15

荀子二十卷

唐楊倞注 清謝塘輯校 朝川善庵(鼎)校 文政十三年刊(平戸、維新館藏版) 八冊

小 09B 2 12

近思録十四卷附考訂朱子世家

宋朱熹・呂祖謙編 清江永集注並附 清王炳校 清同治八年江蘇書局刊 五冊

小 25C a 4 2

朱子年譜四卷考異四卷朱子論学切要語二卷校勘記

清王懋竑編 清王炳校 清同治九年永康氏刊 四三冊

小 25C a 4 4

孟子集注七卷

宋朱熹撰 江戸刊 明和三年印(京都、勝村治右衛門) 三冊

09B 2 10

韓非子二十卷韓非子識語三卷

片山格・朝川慶校 清顧広圻識語 弘化二年刊(修道館藏版) 七冊 覆刻清嘉慶間覆宋乾道一年黄三八郎刊本

小 25C e 4

欠識語卷中

曝書亭集八十卷

清朱彝尊撰 江戸写 九冊

小 25D 25 9

存卷三十一、八十

管子二十四卷

唐房玄齡注 明劉績增注 沈鼎新·朱養純評 朱長春通寅 朱養和輯訂 武田梅龍

(欽詠) 校点 宝曆六年刊(京都、文泉堂等) 七册

大 09B 2 16

李西涯擬古樂府

明李東陽撰 明謝鐸·潘辰評·明何孟春注 真下穆校 安政五年刊(游焉吟社藏)

版) 聯版書院木活字印 一册

小 38A 4 26

康熙字典十二集並補遺·備考

清康熙五十五年勅撰 清刊 十三册

小 47D 4

安井息軒拔抄本附錄

周礼義疏拔萃卷二

乾隆四十三年勅撰欽定周礼義疏四十卷本 一册

09B 3 1

擘經室集拔萃

清阮元撰 一部自筆 一册

09B 3 2

困学紀聞拔萃

宋王忠麟撰 一册

09B 3 3

咳余叢考拔萃

清趙翼撰 一册

09B 3 4

春融堂集拔萃

清王昶撰 一册

09B 3 5

明清紀略拔萃·簷曝雜記·皇朝武功紀盛

清趙翼撰 一册

09B 3 6

海東諸国記拔萃

朝鮮申叔舟撰 天保十年抄 一册

粵東義勇檄文 天保十五年抄 一册

09B 3 7

龍威秘書抄錄 清馬俊良編 天保十二年抄 一册

09B 3 9

日知錄拔萃 清顧炎武撰 一册

09B 3 10

六研齋筆記抄錄 明李日華撰 一册

09B 3 11

十駕齋養新錄拔萃 清錢大昕撰 一册

09B 3 12

說鈴拔萃 清吳震芳編 一册

09B 3 13

渭南集抄·望溪集拔萃附欽定武英殿聚珍版程式

(成造木子) 槽版)

宋陸游撰·清方苞撰(附) 清金簡奉勅撰 一册

09B 3 14

曝書亭集拔萃 清朱彝尊撰 一册

09B 3 15

雕菰樓集拔萃附蜜梅花館詩錄拔萃

清焦循撰(附) 焦廷琥撰 天保十年

抄 一册

09B 3 16

焦氏筆乘拔萃 明焦竑撰 一册

09B 3 17

古微書拔萃 清孫穀編 一册

09B 3 18

論語校勘記拔萃·論語補疏拔萃·論語述何拔萃

清阮元·焦循·劉逢祿撰 一册

09B 3 19

沈歸愚全集拔萃·尤西堂集拔萃·大学章句定說附

錄別解·孟子校勘記拔萃下

清沈德潛·尤侗·阮元撰 一册

北窓瑣談前篇拔萃	橘南谿(宮川春暉)撰	一冊	09B 3 20	
江閑筆談	朝鮮趙泰億編	天保十一年抄	一冊	09B 3 22
孤憤抄	一部自筆	一冊	09B 3 23	
国書拔萃(秉燭談拔萃)	伊藤東涯撰	天保十年抄	一冊	09B 3 24
寿永箏記実	天保八年抄	一冊	09B 3 25	
論語詳解拔萃四卷	明郝敬撰	四冊	09B 3 26	
温史拔萃	宋司馬光撰	一冊	09B 3 28	
知不足齋叢書拔萃	清鮑廷博編	四冊	09B 3 29	
淡海奇聞二・三		二冊	09B 3 30	
* * *				
内典至要	江戸写	一冊	09B 5 22	
癸亥甲子新聞・長薩異聞	江戸写	一冊	09B 5 24	
薩英對話附宸翰(孝明天皇)写并御請書(徳川家茂)	江戸写	一冊	09B 5 25	
随見抄	江戸写	一冊	09B 5 26	
関西寢覚(講武新書七卷)	儲古齋記誠之述	江戸写	二冊	09B 5 27
安井息軒自著稿本				
国疆議案	堀織部・村垣典三郎撰	江戸写	一冊	息軒書
上息軒先生後書(庚戌稿)	江戸写(儲古齋藏罪紙)	一冊	09B 5 28	
書說摘要四卷	文久一年自筆初稿	四冊	09B 1 1	
書說摘要四卷	明治二年(慶応四年)自筆再稿	四冊	09B 1 2	
書說摘要四卷	明治大正間写	三冊	09B 6 1	
欠卷三				
書說摘要四卷	明治大正間写	一冊	09B 6 1	
存卷一				
書說摘要四卷	明治大正間写	一冊	09B 6 1	
毛詩輯疏十二卷	明治四・五・六年自筆再稿	十二冊	09B 1 3	
毛詩輯疏十二卷	明治間写	卷一自筆訂	三冊	09B 6 2
存卷一、三				

- 毛詩輯疏十二卷 明治間写(薄葉) 09B 6 2  
 存卷三・四・五
- 周礼補疏十二卷 近代写(薄葉) 十冊 09B 6 3  
 周官(周礼補疏) 近代写 一冊 09B 6 4  
 存天官冢宰
- 周礼(周礼補疏) 江戸明治間写 竹添井々校 二冊 09B 6 5  
 存天官・地官
- 息軒先生礼記說六卷 鈴木正義編 明治間写 二冊 09B 6 6  
 09B 6 7
- 左伝(補杜) 輯釈十卷 自筆初稿 九冊 09B 1 4  
 僖公十六年〜二十八年誤配再稿本
- 左伝(補杜) 輯釈二十五卷 自筆再稿 十冊 学問所 改印記 09B 1 5  
 襄公八年〜二十七年誤配初稿本
- 左伝輯釈二十五卷 江戸明治間写 自筆校訂 四稿 十冊 09B 6 7  
 四冊
- 欠卷一・六・七・八・十三・十五・十六・二十二  
 息軒先生左伝說七卷 鈴木正義編 明治間写 二冊 09B 6 8
- 大学一卷中庸一卷(学庸說) 松本豊多編 明治十九年写(薄葉) 一冊 09B 6 9
- 論語集說二十卷 自筆初稿 二冊 09B 1 6  
 存学而〜公冶長・季氏・堯曰
- 論語集說二十卷 自筆再稿 一冊 09B 1 6  
 存先進〜衛靈公(卷十一〜十五)
- 論語集說二十卷 三稿 自筆校正 一冊 09B 1 6  
 存先進〜子路(卷十一〜十三)
- 論語集說六卷 一部自筆四稿 自筆校正 三冊 官許印記  
 存学而〜郷党(卷一〜三) 09B 1 6
- 孟子(趙注補正) 定本十四卷 明治六年自筆稿 七冊 09B 1 7
- 孟子定本十四卷 明治間写 十四冊 09B 6 10
- 戦国策補正二卷 自筆初稿 一冊 09B 1 8
- 戦国策補正二卷 自筆再稿 二冊 09B 1 9
- 管子纂詁二十四卷 自筆初稿 三冊 09B 1 10  
 存卷十〜二十一
- 管子纂詁補正 自筆稿 一冊 09B 1 10
- 管子纂詁二十四卷 江戸明治間写 自筆校訂 九冊

存卷一、六、十四、二十四

讀書余適二卷 江戸写 再稿 二冊

蔵 09B 6 12

続讀書余適 自筆稿本 一冊 河原氏蔵書印記

09B 1 11

睡余謾稿一卷 (漢文) 自筆初稿 (一部別筆) 一冊

09B 1 12

睡余漫筆三卷 (仮名交り) 明治八年自筆初稿 一冊

09B 1 13

睡余漫筆 明治間写 再稿 (薄葉) 一冊

09B 6 14

睡余漫筆三卷 近代写 一冊

09B 6 15

睡余漫筆 (別本漢文) 近代写 (薄葉) 一冊

09B 6 13

東行日抄 自筆稿 一冊

09B 1 14

日向記略残欠 (仮名交り) 自筆稿 一冊

09B 1 15

洗痾日乘 自筆稿 (薄葉) 一冊 河原氏蔵書印記

09B 1 16

辨妄 江戸明治間写 (薄葉) 一冊

09B 6 16

游従及門 自筆稿 一冊

09B 1 17

故旧過訪 安政六年自筆稿 一冊

09B 1 18

三計塾学規 江戸写 一冊

09B 6 17

時務一隅 近代写 (薄葉) 一冊

09B 6 18

年譜 (息軒先生自述年譜) 近代写 一冊

09B 6 19

班竹山房蔵書目 元治一年九月改 江戸写 (一部自筆) 一冊

09B 7 1

史記考文補注 自筆稿 二冊

09B 3 27

宕陰文稿・犀潭文鈔 安井息軒 (衡) 手批 昭和八年影印 一冊

09B 2 17

安井朴堂早年蔵書

好古日録二卷 藤原貞幹 (藤井無仏齋) 撰 寛政八年刊 (京都、鶴鶴惣四郎等) 二冊

翠 05 4 1

好古小録二卷附録一卷 藤原貞幹 (藤井無仏齋) 撰 寛政六年刊 (京都、鶴鶴惣四郎等) 二冊

翠 05 4 2

常山紀談二十五卷拾遺四卷附録一卷 湯浅常山 (元禎) 撰 明治十二年刊 (東京、内外兵事新聞局) 十五冊

翠 22G 2 18

日本政記十六卷 頼山陽 (襄) 撰 明治十三年刊 (頼氏蔵版) 八冊

翠 22K b 2

珮川詩鈔四卷 草場珮川 (華) 撰 嘉永六年刊 (草場氏濯櫻堂蔵版) 四冊

安家 22L 2 8

春秋左氏伝校本三十卷 晋杜預集解 唐陸德明音義 秦滄浪 (鼎) 校 明治四年刊 (大阪、河内屋真七等) 十三冊

安家 25A e-3 4

欠卷三、六

縮臨古本論語集解十卷

魏何晏撰 石川竹厓(之駁)校  
天保八年刊 明治印(三重県蔵)

版)二冊

翠 25A h2 5

史記論文一百三十卷

清吳見思編 吳興祚參訂 文政九年刊  
明治印(大阪、中島徳兵衛)

二十五冊

安家 25B 2 3

三蘇全集

清了翊清校 清道光七(十三年眉州三蘇祠刊)  
四十八冊 島田重礼旧蔵

嘉祐集二十卷 宋蘇洵撰

東坡集八十四卷目二卷 宋蘇軾撰

斜川集六卷 宋蘇過撰

安家 25D 2

欠欒城集四十八卷後集二十四卷三集十卷應詔集十二卷 宋

蘇轍撰

劍南詩鈔

宋陸游撰 清楊大鶴編 清愛日堂刊 七冊

竹外二十八字詩二卷後編二卷

藤井竹外(啓)撰 明治十一年刊(滋賀、鳥

居兵吉) 四冊

安家 38C 4 13

書記集解三十卷

河村秀根撰 天明五年刊(河村氏律菴蔵)  
版)二十冊 名古屋藩校旧蔵

安家 51A b 1

閑迺寢覚七卷

儲古齋記誠之述 江戸写 二冊

安家 09B 5 27

## 解説編

### 第一章 安井家の蔵書構成

昭和十三年に財団法人斯道文庫の所有となつて現在の斯道文庫に受け継がれている安井家の蔵書は、一千一百四十二点、七千三百八十冊及び十帖である。そしてこの蔵書は、安井息軒を中心としてその父安井滄洲、その外孫安井朴堂の、三代に亘る家学の足跡を遺すものであり、著作と蔵書が一体となつて学問の実体を示す、日本儒学史に極めて貴重な遺産であると言わねばならない。うち、滄洲の旧蔵書と考えられるものが十四点七十五冊、息軒の著作の自筆稿本が十九点七十冊、同じく著作の稿本が二十点七十六冊、また息軒が諸書から抜き書きした抜抄本が二十九点三十六冊、そして息軒のおびただしい書き込みのある旧蔵書が三十八点一千二百六十四冊七帖含まれている。その外は全てが、朴堂の収書に係るものであるが、家学を継いだ朴堂は、日本儒学史研究に資する原資料の蒐収に努めたため、息軒の蔵書と有機的に結びつき、無駄のない儒学研究の小宇宙

を形成することとなつたのである。

一般に、家学累代の蔵書を各代ごとに分別するのは困難なことであるが、安井家の場合には必ずしも豊富な蔵書量を誇つたわけではなく、一部一部を大切に読み込んでいったもので、その際に捺された蔵印が所蔵者を物語っていると考えられるのである。滄洲は「稽古堂蔵」という墨印、息軒は「斑（班）竹山房」という大・小二種、また「班竹山房蔵書記」の朱印を用いているのである。勿論蔵書の全てに蔵印を捺すとは限らないし、後代の人が先代の印を用いることもままあることであるが、安井家にあつてはそうした複雑さは感じられず、ごく自然なありのままというとらえ方が妥当かと思われるのである。学問も、人柄も、蔵書も、そのままの、全て風土と自然に育まれた誠実なものであつたと言ふべきであろう。息軒の長男棟蔵の別号と申しき「慕楠楼」との墨書もみえるが、次男の謙助、その子の千菊が明治十六年（一八八三）までに早逝したために、長女須磨子の長子小太郎が安井家を継ぐこととなり、以後の収書は小太郎に委ねられることとなつた。その小太郎は明治九年（一八七六）息軒が他界するとともに漢学の師を鳥田重礼に仰ぎ研鑽を積み、明治十一年には大阪で草場船山塾に入った。息軒も一時

入門した昌平校教授古賀侗庵の同門というよしみからであろう。おそらくはこうした頃の早年、二十代ぐらいの所持に係ると思われる蔵書に、「翠紅園安井氏蔵書記」「安井家蔵書」の印記が捺されているのである。その後、帝国大学に入学、再び島田門下となつて、恩師の長女琴子と結婚した（明治十八年・一九八五）。島田氏は海保漁村の門生で、漁村はまた息軒と松崎慊堂の同門であるから縁深いものがある。またその頃、帝国大学に経書を講じた竹添井々は、熊本の木下犀譚門下で、犀譚は息軒が最も信頼した親友であつた。小太郎の義弟、書誌学者の島田翰は竹添門下として一世を風靡した。こうして、息軒にまもられるようにして小太郎は朴堂と号し漢学の大家となつたのである。明治三十五年（一九〇二）北京大学堂に招聘され、在燕中に購入したものもあるが、大部分は神田の松雲堂野田文之助氏から購入したものである。貴重なものと思われるものには「安井文庫」という長方印が捺してあるが、おそらくは朴堂の捺印に係るものかと推測される。また、装演や貸出の際と思われるが、小さい紙に「安井」という丸印を捺してはさみ込んであるものもある。（「爾雅」221 a 6）実際にはあまり貸借は行なわれなかつたが、都立中央図書館の諸橋文庫に朴堂より借りたもの

がそのまま残り、安井文庫にも諸橋止軒より借りうけたと思われるものがそのままとなつたようなものもある。

以上のような構成が、印記によって物語られているのである。

「稽古堂蔵」印が滄洲のものであることは「朴堂遺稿」巻四の「書王父手録尚書後案後」に言及がある。「癸亥三月。西村子俊示尚書後案一套。毎巻首有讀杜草堂稽古堂印。欄上細字皆係王父手録。（中略）稽古堂滄洲先生蔵記也。」（句・返は筆者）大正十二年に西村子俊が清の王鳴盛撰「尚書後案」を示されたが、「讀杜草堂」（寺田望南）印記と「稽古堂」印記があつた。欄上には王父（息軒）の書き入れがあるというが、今この書は所在が知れない。西村子俊は息軒手録書（書き入れ本）二百余巻を所蔵していたという。西村子俊は西村天因（慶応一〜大正十三・一八六五〜一九二四）で、朴堂とは島田氏双桂精舎の同門。

「班（斑）竹山房」印記の由来については「安井息軒先生」（若山甲蔵）の五十頁「三計塾の由来」に詳しく記されている。それによれば、息軒は天保九年郷里の飢肥を一家でひき払い、江戸に移住して翌年三計塾を開いたのであるが（息軒四十一歳・黒江一郎氏は天保十二年の開塾とする）、塾舎の二階を班竹山



房と名づけ、郷里から持ちきたった虎斑竹を思い出のより所と  
していることを示そうとしたのであった。それは同時に息軒の  
書齋名でもあったわけである。「斑」も「班」も同じ意味で  
「まだら」である。大小二種の蔵印のうち、大印の方が「斑」  
で小印には「班」を用いている。これらはいずれもその印塊が  
遺されていないのが残念であるが、息軒の印などはおそらく然  
るべき人物の刻字に係るものと思われるのである。

さてそれでは各蔵書の実状について解説を加えていくことと  
する。

## 第二章 滄洲の蔵書

前章に述べた如く、「稽古堂蔵」の墨印を捺すものは、十四  
点である。

滄洲の人と為りや事蹟に就いては、息軒の「太平山表」（「息  
軒遺稿」巻四）に詳しいが、更に昭和五十三年発行の「安井滄  
洲紀行集」（黒木盛幸編・清武町教育委員会発行）にも載せら  
れている。文化一―三年の江戸・京都を旅行した際の旅行記

「尚白集」（これは昭和三十四年に黒江一郎編注の「安井氏紀行

集」にも収録されている）をはじめ、数篇の旅行記や随筆の原  
稿が清武町に保管されているが、それらを翻刻したものがこの  
「紀行集」である。

滄洲は明和四年（一七六七）に清武の上中野に生れ、寛政十  
一年（一七九九）に二男息軒をもうけた。家塾を経営する傍ら  
近郊を旅しては、漢詩、俳句等を中心とした仮名交り紀行文を  
著していた。文化一年から三年まで藩主に従い江戸・京都と回っ  
た際に、江戸では古屋昔陽（熊本藩儒、秋山玉山の門下、文化  
三年七十三歳で没）、京都では皆川淇園（亀岡藩儒、古学派、  
文化四年七十四歳で没）に教えを請うたという。文化十年（一  
八一三）に藩の教授となり、文政十年（一八二七）には明教堂、  
天保一年（一八三〇）には振徳堂を興し、飢肥藩の学政教育に  
寄与する所が大であった。その間に、息軒は文政七年（一八二  
四）江戸で昌平校に入学し、文政十年に帰郷して川添佐代と結  
婚し、振徳堂にて父子ともに教鞭をとっていた。その頃のこと  
は森鷗外「安井夫人」に描かれているとおりであるが、その臨  
終に際して、息軒の剛直を戒めたという話は息軒の「太平山表」  
にみえて有名である。

また、宮内猗斎翁（維清）撰の「猗斎翁遺稿」（大正五年刊）

にも「寿安井滄洲翁序」の一文がみえる。猗猗齋は薩摩の人で文政年間、昌平校における息軒の同学であった。この記事の存在は、後に小牧昌業が安井朴堂に教示したものである。

滄洲が郷里にて子弟の教育に当たっていた頃の日本の儒学界の動向と言えば、寛政一年（一七八九）に寛政異学の禁令が発せられたことが発端となり、荻生徂徠の学問を受け継ぐ古学派、また折衷学派を掲げる学者達に重大な影響が出たことが挙げられる。福岡の亀井南冥は、ために圧迫の犠牲となり藩学を罷免となった。冢田大峰、亀田鵬斎、山本北山等江戸で活躍していた学者達にも政策の波が押し寄せ、門弟が減少していったという。

一方、学会の主流に位置していた朱子学派の林家は、寛政四年（一七九二）に述斎が八代大学頭となるや文運の中興を遂げ、古賀精里、尾藤二洲、柴野栗山の寛政三博士は幕儒として名声を博した。文化年間には佐藤一斎が林家塾の柱として一世を風靡した。この頃から、後に息軒の師となる松崎慊堂が頭角を現し始めるのであるが、要するに滄洲の時代は、古学・折衷学から朱子学全盛の時代へと流れる流動の時代なのであった。

文化十一年（一八一四）南冥は憂悶のうちに七十二歳の幕を

閉じた。また、文化四年（一八〇七）、十年（一八一三）、十四年（一八一七）と栗山、二洲、精里も順に没して人も世代の替わりがみえてくる時代となってきた。

こうした時代や人の流れとは無関係であるかのように、滄洲一門は旅をして詩を詠み、樸々と読書に励んでいたのであった。息軒の学問が、江戸昌平校に在っても時流にとらわれず、黙々とひたすら読書に努めることに一貫して、そうして功が成ったのは、まさに滄洲の教育と清武の土地柄に由来するものであることが明確に理解されるのである。滄洲の随筆集の第七に「友人問テ曰、朱子ト徂徠トノ学風何レカヨロシキヤ。予答ヘテ曰、一句一章ノ解方ニハ何レモ是モアリ非モアルベシ。然レドモ、朱子ノ学ハ性理ニ泥テ禅学ニ似タリ、徂翁ノ学ハ礼楽ヲ解、其外ノ事多ク、古ニカノウト云ベキカ、然レドモ朱子学ノ幣ヲ除カンタメニ、言、激切ニ過タル所アルベケレドモ其功モ亦大ナリ。近年人々学流ヲ立ルモノモ皆徂徠翁ノ先登ニ従フテナリ。且徂翁ヲ陽ニ非トスルモノモ、陰ニ其説ヲ奪フモノ多シ、是徂翁ノ学力大ニ人ニ過ギタル所アル也。」（「安井滄洲紀行集」から引用）とある。全く当を得た評ではないだろうか。息軒の注解学もこの姿勢を如実に実践したものであったと言えるだろう。

さて、それではその学塾でどんな読書が行われていたのかを知るためにも滄洲の蔵書の実態が求められるところであるが、本文庫のものとしてやはり一部分に過ぎぬであろうが、徂徠や春台のものあり、また宇野東山の注釈本など、内容的にも当時流布したものが中心であったことが知れる。しかし古学・古注学を基本としたものであったことは否めないであろう。外に、振徳堂の旧蔵書は散佚しているようで、わずかに数点を日南市立図書館に見うけられるに過ぎない。

滄洲の手沢本は同時に息軒も用いたわけで、息軒の読書の跡がむしろ多きを占めているのが特徴と言えよう。

「古文尚書標注」「詩経説約」「毛詩鄭箋標注」「孝経」「国語」「荀子」にそれぞれ息軒の書き入れが多く、又これらについては息軒の項で述べることにするが、滄洲はあまり蔵書に手を入れることはしなかったようである。「文選傍訓大全」に少々項目等をメモ書きした箇所や、「孝経」の封面に「寛政十二閏四月求之」と墨書してあるの等がその手蹟と思われるものである。一体、書物の上欄におびただしく書き込む姿勢は、息軒が江戸へ出て学んで以来ではないかと推測するが、他のテキストとの校勘や、是とすべき学説の引用や、また典拠出典の説明等、

考証学的な風格は、松崎慊堂の影響なくして考えることはできないのではなからうか。

そして逆に、息軒も滄洲も本文には句点を朱などを用いて入れることはあっても、けして訓読はいれない。それは、滄洲の「随筆」に、「読書ノ法、従頭直下トテ浮屠氏ノ仏経ヲ読如ク、上ヨリマ下リニ読ムガヨシ。然レドモ吾邦久シク顛倒読ニ習レタレバ、急ニ改メガタケレドモ、成ダケハ音ニヨミ少シニテモステカナノ少キヨウヨムベシ。……」とある教えに拠っているのである。後年、息軒の自著にあつて、その自筆の稿本には殆んど訓点を加えていないのは、早くに滄洲の教育を身につけた賜物であつた。それはまた、徂徠学の特徴でもあつたのである。いずれにしても、唐代の文集（賈島、杜甫）を読むこと、また「荀子」についても然り、徂徠学によって顕揚された所が大であり、「孝経」の校者太宰春台（延享四年六十八歳没）も徂徠学であるし、「古文尚書標注」「毛詩鄭箋標注」の標注者宇野東山（文化十年七十九歳没）も、学統は清水江東（寛政七年五十六歳没）、宮瀬龍門（明和八年五十三歳没）、服部南郭（宝暦九年七十七歳没）と辿り获生徂徠へと至るわけで、「左伝附注」の校者奥村春猷も山本北山（文化九年六十一歳）の系統で所謂

徂徠学以降の折衷学に属するが、この学派も祖は徂徠に求め得る人々であつて、概ね滄洲の学問は徂徠学を基盤としたものであると、旧蔵書からも判断されるところであろう。

「社倉私議」は、大阪の中井竹山（積善、享和四年七十五歳没）が安永三年（一七七四）に、さる奉行に献上した議案書で、きさんの時に備えて倉を設ける制度を社倉と言うが、南宋の朱熹が作成した社倉法を参考にしてまとめたものである。寛政六年にその起草の始末等を記した竹山の一文も附録として抄出している。この附録は滄洲の自筆と思われ、他は異筆である。墨付二十九丁で本文共紙の元表紙に「社倉私議」と外題を墨書するのは息軒の手である。毎半葉九行で字面の高さは約二十糎である。「安井文庫」印記を捺す。為政にも充分に関心を持った滄洲の学問であつた。

「鳩巢小説」は、一部自筆にして他は異筆の抄写に係り、仮綴の三冊本で本文共紙の表紙に「鳩巢小説上中下」と外題を書す（滄洲の手）。字面高さは約二十一糎で、墨付六十四、四十八、五十四丁である。

滄洲も息軒もこうした随筆は好みであつたらしく、自らも漢文にて小ばなしを物したりしている。

「左伝附注」は明の陸燾（弘治七、嘉靖三十、一四九四—一五五二）の撰で、明の嘉靖刊本を翻刻したもの。奥附に寛政己未（十一年、一七九九）求古館蔵とあり、江戸西村源六の名がある。こうした明代の経書の注釈書は、江戸時代を通じて、受容翻刻が盛んで、日本の漢学者の重視する所であつたことは、中国における受容と比較する時、出版史において極めて特徴的であつたと言える。左右双辺八行十七字、白口、板框十八・六×十三・三糎。

「賈浪仙長江集」は刊記に、正徳五年（一七一五）京都、茨木多左衛門の名があり、無界の九行二十字、白口、板框二十一・一×十二・七糎。「杜詩」とともに唐人の詩に意をむけることは徂徠学の影響する所であつた。

「杜詩偶評」は、外題に「官板」と刻し、末に享和三年（一八〇三）の刊記がある、所謂昌平校の官板である。左右双辺十行十九字白口、板框十七×十三糎。句点、声点、圈点、傍注を加える。清乾隆刊本の翻刻である。

「評苑文選傍訓」は、明王象乾の「文選刪注」をもとにしたテキストで、注のない正文に訓点や傍注、傍線等を附刻し、新たに頭注をつけ加えた読みやすいものとなっている。封面に

「文選傍訓大全」「攝陽書肆 崇道堂藏版」とあり、首に凡例、昭明太子文選序、呂延祚の「進五臣集注文選表」、李善の「上文選注表」を備え、元禄十三年（一七〇〇）、京都風月勝左衛門の刊記がある。単辺の無界に十行二十一字、白口、板框二〇・四×十六糎、但し、卷十五の版心下部に「風月板」と陰刻にする。「文選」は五臣注、李善注をもととして古くから日本人の古典となっていたが、江戸時代には、より自らの作詩作文の用として、簡便な、量的にも手頃な、こうした正文本がかなり流布していたようで、滄洲の所蔵は、当時の儒者の、文選受容の典型であったと考えられる。

徂徠の著作「度量衡考」「徂徠集」は、いずれも書き入れはない。「度量衡考」の外題「度量衡一・二」は滄洲の手に係る。封面に「官刻 度量衡考」とあり、享保十八年（一七三三）荻生北溪（徂徠の弟）の序があり、双辺九行二十字、板框二十一×十四糎、白口で句点訓点を刻している。「度・量」は徂徠、「衡」は北溪の撰になる。末に享保十四年の金谷（徂徠の甥、養子）後序を附す。享保十九年の奥付があり、中村新七、松会三四郎など八名の書肆が連名。「合二本 稽古堂藏」と本文末に墨書するが滄洲の手ではない。

「徂徠集」は、封面（第十四冊にもある）に「南紀書林 无尤堂／浪華書林 文金堂」とあり、元文一年（一七三六）の本多猗蘭（徂徠の弟子、勝忠統と称す）の序、総目録を附す。左右双辺十行二十字、板框二十×十四・五糎、白口で句点のみを刻す。末に大坂森本文金堂河内屋太助の蔵板目録があり、奥付に「寛政三歳辛亥夏六月求版／南紀和歌山 中井孫九郎蔵」とあり更に大坂森本太助・江戸前川六左衛門・若山中井源吉の三名が名を連ねる。「安井氏ヨリ借用」という付箋が残り、朴堂が誰かに貸出した形跡がある。

### 第三章 息軒の蔵書

#### 第一節 蔵書

##### 第一項 唐本の購入

息軒の学問を知るうえで最も大きな位置を占めるのがこの項目である。勿論、唐本は中国（清国）の出版物で舶来品であるから、価格も高価で入手には困難が伴った。従って、江戸への

移住を決めて三計塾を開いてから後のことであったが、入手の喜びは一方ならぬものであった。なかんづく、「十三經注疏」

「皇清經解」は息軒の読書を象徴する二つの大きな柱である。

弟子、谷干城（高知藩士で後に軍人・政治家、天保八〜明治四十四年）の遺稿集に息軒の經学の一端が記され（「谷干城遺稿」隈山詒謀録）ているし、自らも「答某生論漢議書」の中でその姿勢を述べているので、息軒の専攻が古注学という範囲に充てられるのも今や常識化されているのであるが、実際にその学問の拠り所としての読書の跡を知る人は却て少ないのではなからうか。

「十三經注疏」は申すまでもなく「易經」から「孟子」に至る十三種の儒学の經典を彙刻したものである。漢・魏晋の注釈を主とし、唐代や一部宋代の疏を加えて簡便に注疏に接し得るようにしたもので、元代の出版に係るものが現存最古の完本である。日本には、明嘉靖年間福建出版の李元陽本や明末崇禎間の毛晋汲古閣本が多くもたらされているが、息軒が購書した天保年間（一八三〇〜一八四三）には、清嘉慶三年（一七九八）に蘇州の書業堂が汲古閣本を覆刻したものが入手しやすかったのではなからうか。まもなく清の阮元の編になる注疏本が（嘉

慶二十一年・一八一六）出されるが、流布においては、いまだ汲古閣本を凌駕するには至らなかつたであろう。

息軒はこの嘉慶三年版の汲古閣本百二十冊を手に入れた。

「毛詩注疏」の表紙に「玉巖」という小印があることから玉巖堂和泉屋金右衛門から買ったものかも知れない。また、「礼記注疏」末に「三両八分 全百廿冊」と墨書し「青藜」印があるから青藜閣須原屋伊八から買ったのであろうか。「周易」四冊は巻二まで書き入れがある。「尚書」六冊は全巻書き入れ。「毛詩」十六冊も全巻に書き入れ。その首に、「安政乙卯正月念五膳於斑竹山房中旧雨楼上 半九陳人衡」と墨書がある。安政二年、息軒五十七歳の時の識語である。「周礼」十二冊「儀礼」十冊「礼記」二十四冊の三礼も全巻に書き入れがある。「春秋左伝」二十四冊は全巻に書き入れてあるが、「春秋公羊伝」八冊「春秋穀梁伝」四冊には不審紙が見られるだけで書き入れはない。「論語」三冊は全巻に朱点を施すが批語は少々で、「孝経」一冊も同じである。「爾雅」三冊は巻一のみ書き入れる。「孟子」五冊は少々批語を書き入れるのみである。

書き入れは細字でしかも欄上に周密で、清朝の考証学者の説を丁寧摘録し、更に自説を加えるという形式で、本文には句

点のみを施し訓点は加えない。今その一つ一つを検討することはできないが、一字一画に氣迫の込もる筆勢は、見る者をして圧倒しないではおかない。本の大きさは二四・五×二五・三糎。左右双辺（一七・七×一一・七糎）九行二十一字。

次に「皇清經解」である。別名「学海堂經解」とも称し、清の学者阮元（乾隆二十九→道光二十九・一七六四→一八四九）が主編となり広州の学塾学海堂で出版した、清朝を代表する一大叢書である。清の乾隆・嘉慶年間頃に活躍した学者の、經書に対する注解書を百八十余种に亘って集めたもので、全てで七十四人の学者が挙げられ、要するに清朝の考証学を集大成したものと云っても過言ではない。収録された諸書の中には、単行本が流布しないものも含まれ、經学研究に果たした役割は、はかり知れないものがある。阮元という学者は、「十三經注疏」の刊刻や、「十三經注疏校勘記」の編纂、更にその校勘記作製の火付け役となった日本の「七經孟子考文補遺」の重刻など、斬新な学問方法を切り拓き、また学者の才能を引き出してまとめあげるプランナーとしての指導者的位置にあった人である。日本における全く同時代の松崎慊堂によく似たスケールの持主であるように思われる。息軒は慊堂を慕うようにまた阮元をも慕っ

たことであろうが、この「皇清經解」が成立したのが清の道光九年で、日本の文政十二年、一八二九年のことであった。息軒が本叢書を入手したのは天保年間か遅くともそれをさ程下らない時と思われるので、まさしく新刊そのものであったわけで、言わば、清朝の考証学の成果をまとまった形でいち早く吸収した人でもあったわけである。その後、咸豐十一年（庚申）に大幅な補刻が行われ、所謂庚申の補刊本というものが流布本となっているが、道光の初印本は却って稀少といわねばならない。版心の下象鼻に「庚申補刊」と刻してあるページが補刻葉であつて、ないページは原刻葉である。勿論初印本には全くそれはない。また、補刻の際に、「国朝石經考異」馮登府撰、など馮氏の著作七種八卷を増刻している。

この初印本は二六×十七糎の大判で、首に「皇清經解」と封面がある。息軒は、後表紙の端に冊数の順番を墨書して、なかには覆い表紙を加え、大切に扱っていた。大部分に亘って不審紙を貼り、朱点を施し、校字をし、批評を加えている。とりわけ朱墨の書き入れが多いのに、次の書が挙げられる。顧炎武「詩本音」、惠棟「九經古義」、江声「尚書集注音疏」、王鳴盛「周礼軍賦説」、翟灝「四書考異」、程瑤田「考工創物小記」「九

穀考」、戴震「毛鄭詩考正」「杲溪詩經補注」「考工記図」、段玉裁「古文尚書撰異」「毛詩故訓伝」「詩經小学」「周礼漢読考」、李惇「群經識小」、孫星衍「尚書今古文注疏」、劉台拱「劉氏遺書」、阮元「孟子校勘記」「考工記車制図解」、焦循「孟子正義」「尚書補疏」「毛詩補疏」「礼記補疏」「論語補疏」、王引之「經義述聞」、劉逢祿「論語述何」、方觀旭「論語偶記」、李黼平「毛詩紬義」、阮福「孝經義疏」、王松「說緯」等である。前述したように、朱点も句点に限り、訓点は一切加えない。自らの著作と、十分に関連が見い出せるのが、実に明確な学問であることを物語っているようである。すなわち、尚書（書經）、詩經、周礼、四書に、力をそそいでいるのがよくわかるのである。また、顧炎武の「左伝杜解補正」にも多くの不審紙を加えるが、自著の「左伝補杜輯釈」という書名なども相似性を垣間見るような気がするものである。

いずれにせよ、息軒の著書は儒学の經典に対する注釈書が主要なもので、その注釈も、自説に偏することなく、「十三經注疏」による漢唐の注疏と「皇清經解」による清の学者の説を有機的に取捨選択して再編成するという、いわば厳しい読書の成果ともいえるものであり、両叢書の息軒に占める位置は、甚だ大きいとしなければならぬのである。

「七經孟子考文補遺」は、享保年間、西條藩の山井鼎が足利学校の宋版を校勘し、「易經」・「書經」・「詩經」・「礼記」・「春秋左氏伝」・「論語」・「孝經」・「孟子」についての通行本との異同を明らかにしたもので、師の荻生徂徠が補遺をまとめて幕府に献上し、それが中国に舶載されて清朝の学者を刺激した。中国の一大叢書「四庫全書」にも収載され、わが国でよりはむしろ彼土において評価が高く、流布した。享保年間出版された版本は得難く、却って嘉慶二年（一七九七）に阮元によって翻刊されたものが、わが国でも通行本となっている。日本の漢学の成果が中国で流行し、日本に逆輸入するという現象は、「論語義疏」等の中国に伝を失した逸存書が日本から中国に逆輸入する現象とちょうど対<sup>たい</sup>になって、この頃の日本の學術水準の高さを象徴する事件であるが、こうした校勘学は、切衷学と称する古注派よりの学者間に受け継がれ、天保年間、息軒の師松崎慊堂によって再び頭揚されることとなったのである。息軒はこの「考文」をもよく引用するが、この「考文」を全て吸収した阮元の「十三經注疏校勘記」（「皇清經解」所収）をもとにして引用しているものと考えられる。書型は二十二・五×十三・五



種と小振りで、封面に「儀徵阮氏小琅嬛僊館栞本」とあり、享保十一・十五年の徂徠の原序、嘉慶二年の阮元の序を冠す。左右双辺有界九行二十一字、版框十三・九×十八糎。

「瓊川吳氏經学叢書」は、蘇州の吳志忠が中心となって、恵周惕、恵士奇、顧炎武等十二家十五種の經説を彙刻したもので、嘉慶道光年間に順次刻されたものを宝仁堂が道光十年（一八三〇）に叢書として印刷したものである。「皇清經解」と同じ頃に船載された息軒の時代の新刊書である。一部「皇清經解」と重なるものもあるが、恵氏の「春秋説」「詩説」、吳英の「有竹石軒經句説」など、息軒にとつて有益な論文集が含まれていた。「左伝杜解補正」（顧炎武）「懶庵先生經史論存」（吳成佐）が欠しているのは、息軒が用いて紛失したのか。大きさ二十四・五×十五・七糎で「道光庚寅重鐫／經学叢書／宝仁堂藏板」と封面にある。「詩説」には「嘉慶壬申瓊川吳氏重刊」と封面に、版心下象鼻に「真意堂」とあり、「大学説」は版心に「蘭陔書屋」、「礼説」は封面に「嘉慶丁巳、蘭陔書屋刊版」版心に「蘭陔書屋」、「易説」は版心に「真意堂」、「三正考」（吳鼐）は版心に「真意堂」、「群經補義」（江永）は封面に「瓊川吳氏雕版」  
「章水經流考」（李崇礼）は封面に「嘉慶庚辰年瓊川吳氏刊行」、

「相台書塾刊正九經三伝沿革例」（元、岳峻）は封面に「嘉慶庚辰依也是園影宋本重刊瓊川吳氏」と、「春秋疑義」（華学泉）  
「道德真經集注釈文」（宋、彭耜）は版心に「真意堂」、「經句説」は封面に「有竹石軒刻」とそれぞれあつて、概ね原刊記を残している。左右双辺九行二十一字（「礼説」は十行二十二字）で版框はおおよそ十七×十二糎ぐらいである。

「平津館叢書」は清の孫星衍（乾隆十八〜嘉慶二十三年・一七五三〜一八一八）の編纂に係る叢書で、自著や旧籍の翻刊四十三種を収載。翻刊の内容は「六韜」（周の呂望）等古代の諸子から「千金宝要」（唐の孫思邈）等の医家まで幅広く、校勘に精審とその評価は非常に高い。自著では「芳茂山人詩録」や夫人王采薇の「長離閣集」等があるが、經学では「書經（尚書）」の学にも精力を傾け、「尚書今古文注疏」を著している。息軒も同じく「尚書」の学にはことさら力を入れていた為に、この叢書は、孫星衍の名とともに最も身近に感じられたのである。う。「尚書今古文注疏」は、「皇清經解」にも収められるので、既にそちらで精読していたのであるが、平津館本にも朱点・墨の書き入れが多くなされ、「壬戌十月廿三日始」と朱書してあることから文久二年息軒六十四歳の時に再び読破したことが知

れる。「平津館叢書」は、嘉慶五年から孫氏没年の嘉慶二十三年までの刊刻であるから、「皇清經解」とほぼ同じ頃の新刊の輸入本として、両書前後して購入したものである。大きさは二十四・一×十五糎で封面には「平津館叢書第幾集 蘭陵孫氏蔵版」と、また「嘉慶幾年 平津館蔵」といった刊記を記す場合が多い。版式は左右双辺で十一行二十字、板框約十七×十一糎のものが殆んどで、一部異なるものがある。嘉慶の精刊本に通例の、刻工は金陵（南京）の劉文奎、劉文楷等である。

「儀礼章句」は清の呉延華の撰。呉氏は乾隆二十年（一七五五）七十四歳で没しているが、その二年後の乾隆二十二年に出版された家刻本である本版は呉氏畢生の大著である。封面に同入堂の嘉慶三年の刊記があるが、或は求版して印刷した後印本かも知れない。大きさは二十四・五×十五・五糎、版式は十行二十一字小字双行、板框は十八×十三糎、句点を刻している。本書には「翠軒／先生／遺書」という小印が捺されることから立原翠軒の旧蔵書であった。翠軒は水戸藩儒で後に彰考館総裁となる。文政六年（一八二三）八十歳で没するが、徂徠学の系統だった為、朱子学派とは相入れなかった。息軒は藤田東湖など水戸藩との関わりが深かったこともあり、本書の入手もある

いはそうした事情からであろうか。綿密な欄上の書き入れは、元の敖継公「儀礼集説」、朱熹の学説、乾隆敕撰の「欽定儀礼義疏」、唐賈公彦の「儀礼疏」などを摘録している。「十三經注疏」の儀礼に書き入れてあるのは主に阮元の「校勘記」を中心とした「皇清經解」からのものであるのに対し、これは敖説を最も多く引用し、息軒に便宜を与えてくれた蔵書家ないし昌平校の書物に依拠している読書の姿である。「儀礼集説」は「通志堂經解」によるものである。引用の後には「衡案」という息軒の自説が多見するのであるが、息軒は礼書（周礼・儀礼・礼記）については著書をまとめなかつたとはいえ、こうした自説を輯めれば、息軒先生儀礼説なる書物が容易に浮かびあがってくるわけである。

次には史書、すなわち、「十七史」、「弘簡録」であるが、息軒は史書に考証を加える学者ではなかつたので書き入れは殆んど見られない。但し、子口書きの書名は息軒の手で、本文には朱点を加える所が見られる。蔵印には「班竹山房」の小印と「班竹山房／蔵書記」の二種類を用い、他に、「北齊書」には陰刻の「班竹／山房」印が用いられる。この陰刻印は安井文庫中の何れの書にも見られぬ珍しい印記である。「史記」が欠して

いるのは、その所以を辿り得ない。また、「唐書（新唐書）」は別版の補配で、恐らくは購入時既に配されていたものであろう。この別版は、南京国子監本（所謂南監本）に属するもので、元の大徳年間（十四世紀初）の開版に係るテキストの流れであるが、補刊を重ねて清代にまで流伝していたものである。版心に補刊の年号を記し、これは明の成化十八年（一四八二）から清雍正七年（一七二九）までの年記がある。

この「十七史」は「十三経注疏」の項で述べた明末の毛晋汲古閣の出版物で、「注疏」と同じく清代に至って覆刻本が流布するが、本版は明末の原刻本である。「史記」「漢書」「後漢書」「三国志」「晋書」「宋書」「南齊書」「梁書」「陳書」「魏書」（第二十一冊）三十冊まで同版の別本を補配する。「北齊書」「後周書」「隋書」「南史」「北史」「新唐書」「新五代史」が、毎年一史、明崇禎一年（十七年）にかけて開版された。「漢書」を例にとれば、左右双辺十二行二十五字版框二十一・五×十四・五糎、白口・版心に間々「汲古閣」「毛氏／正本」とある。巻頭は「高帝紀第一上」と小題が上にあり「漢書一」と大題が下にある古い形式に依っている。「新唐書」は各葉一定ではないが、双辺あり単辺あり、十行二十二字約二十一×十四糎で白口、上

象鼻に補刊の年号を刻す。

息軒は、忠実はもとよりであるが、人物の伝記により興味関心を持っていたこともあって、「十七史」の購入は大きな読書の糧をもたらしたのであったが、また当時の儒者の読書という見方からすれば、江戸時代を通じて史書に和訓を施して出版する風潮が、時代を降るにつれて「晋書」「唐書」「五代史」と幅広い史書へと及んでいくなかで、息軒のように一儒者が全史に亘って目を配る勢いというものはまさに、端倪すべからざるものであったと言わなければならぬ。

「弘簡録」「続弘簡録元史類編」も一セットで購入したもので、古書肆が「十七史」と揃えたものであろう。明の邵経邦が嘉靖三十六年（一五五七）に完成した唐・五代・宋・遼・金の別伝である。曾孫の遠平は清康熙年間にこれを重刻、更に「元史」の別伝を自ら編んで康熙三十八年に上表文を為り、同四十五年に朱彝尊の序を冠して上梓した。伝は簡便であり分類も独自で、正史よりも読み易いと自ら主張する。息軒は伝記を読むこともそうであるが、題材を採って随筆風に文を為すのが好きであったと思われるが、こうした史実を改編した伝記は息軒の興によく合致するものであったにちがいない。「班竹山房／蔵書記」

「班竹山房」小印の二顆を用いる。大きさは二十五・五×十六・五糎、単辺十二行二十四字板框二十・二×十四・五糎、白口。黄紙の封面を有し、宣伝文があること、また続編には白紙の封面に「継善堂藏板」とあることから、板木が邵氏から書肆に流れて後に刷られたものであろう。

「近思録集注」「朱子年譜」の二書はそれぞれ同治八年（明治二年・一八六九）・九年の出版に係り、明治九年に没した息軒最晩年の蒐書であり、新刊中の新刊本であった。息軒は、古注学に属する学者であるが、宋代の朱熹を中心とする新注に対してもけして偏見を持つものではなかった。「近思録集注」は清の考証学者江永（康熙二十年～乾隆二十七年・一六八一～一七六二）の注釈書で、「四庫全書」にも収載されている。江永の著作は「周礼疑義举例」等「皇清経解」に数種を収め、息軒にとっては関心深い学者であった。第四冊（卷十三以降）が重複している。左右双辺九行十九字白口、板框十九×十二糎。封面に刊記、「同治八年夏／江蘇書局刊」。「朱子年譜」は清の王懋竑の編纂で、王氏の著作は「皇清経解」にも「白田草堂存稿」を収める。本版は王氏白田草堂の家刻本を翻刊したもので、「近思録」と同じく清の王炳の校勘を経る。左右双辺八行二十

字白口、板框十七・五×十二・五糎、版心に「白田草堂」と、又封面に「同治庚午重鑄白田草堂本／永康応氏藏板」とある。連史紙印。

この二書に共通するのは、清の応宝時が出版せしめていることと、ともに跋文に記すところである。応宝時は、慶応三年（同治六年・一八六七）に息軒の「管子纂詁」に序文を寄せ、また明治四年（同治十年・一八七一）に「左伝輯釈」の序文を寄せている人で、この二書は、明治三・四年の際に息軒に贈り寄せられたものなのであろう。

「康熙字典」は、やはり字典として必備のものであったのであろう。大部の冊を使いやすく合冊して表紙に部首名を書き付けている。この字勢こそは、天保年間、息軒の最も充実した読書期のものであって、内に散見する不審紙も息軒のものである。書き題簽もまた息軒のものである。本書の版本は刻種が多く、原刻本を見出すのは容易なことでないが、本版も覆刻に属するものと思われる。双辺無界に八行小字二十四字、板框十八・九×十二・九糎、白口、竹紙。刷りは良い方ではないが、大切に用いた息軒の意気が伝わってくるようである。

「曝書亭集」の影写本は、「書・序・跋・伝」等を収めた巻三

十一から後半のもので、外題に「曝書亭文集一〇九」と墨書する所からもとこの部分のみを抄出せしめたものであろう。息軒は自ら「抜抄」をなす如く、「曝書亭集」に対する熱意はなみなみならぬものがある。薄葉を用いている。十二行二十三字で字面高さは約十九糎。息軒の自筆部分はない。唐本の影写本であるから、この項目に準じた。

## 第二項 昌平校・天保年間の読書

息軒は二十六歳の文政七年（一八二四）、江戸にて古賀侗庵の門に入り、昌平校に入寮した。この頃の読書はどのようなものであったかは残る資料がない。ただ、この時に塩谷宕陰と出会ったことは最も大きな事件であった。後に著している「故旧過訪録」（明治三十年に翻印）に「毅侯最親」と述べて、毅侯Ⅱ宕陰を五人の昌平校同学の筆頭に挙げていることから、その親交のほどを伺うことができる。更には、宕陰を介して知遇を得た恩師松崎慊堂との邂逅は何にも増して息軒の学問を鼓舞するものであった。文政九年五月十二日の「慊堂日曆」に「安井仲平 飢肥家士 在昌平三年 今退在邸 十八日来謁」とみえ

るのがそのはじまりであった。この時息軒は藩主祐相の侍読となつて江戸藩邸に勤番を命ぜられていたのであった。藩主の信任厚く、翌年には藩主とともに帰国して、父滄洲と郷校明教室、藩校振徳堂での教育にあたった。ところで「読書余適」の解説にも述べた如く、天保六年（一八三五）父滄洲をなくし、翌年より江戸への移住にとりかかってから、天保八年に再び昌平校に入寮し、慊堂に教えを請うこととなつてからの息軒の読書の量は、想像を絶するものとなつていった。昌平校では世話役を命ぜられるとて外に下宿を求め、また、芝の増上寺に寓居して読書に励むなど、その勉強ぶりは当時の同学からみても尋常でなかつたようである。

そして、その頃の読書の跡を垣間見ることのできる資料が、この安井文庫中に遺された諸書からの抜抄本なのである。三十七点三十七冊に達する抜抄は、けして入手が容易ではなかつたであろうやや厚手の楮紙（袋綴にしておおよそ二十五×十六糎の大きさ）に、単なる敷き写しではなく、読書で得た要点を、一字一字しっかりと力を込めて精写したものであり、メモの類とは全く様相を異にしている。一切訓点は施さず、借覧した諸書を如何に咀嚼したものであるかは、もはや後人の推測する所で

はない。

行字数は一定してはいないが、字面の高さはおおむね二十種以内である。「咳余叢考」は十行の刷野紙に、「論語詳解拔萃」は愛日樓野紙（佐藤一斎のものか）をそれぞれ用いている。一部他人に筆写せしめた箇所も見うけられるが、息軒の天保頃の稿本（「読書余適」など）に特徴的な字勢が大半を占め、この一連の抄写はまさしく天保年間の充実した時期にたどることができるのである。

さらに、「寿永箏記実」「海東諸国記拔萃」「雕孤樓集拔萃」「国書拔萃」「江閑筆談」「龍威秘書抄録」「粵東諸国記拔萃」に記される奥書は、その年号を示してこの推測に根拠を与えるものである。順にそれぞれ左の如し。

天保丁酉臘月念四夜、江戸芝山学寮南窓燈下騰原本、係于肥後文学木下子勤蔵書

斑竹山房主人衡

天保己亥夏五月八日、清瀧 安井衡書於仙駝谷邸中斑竹山房

天保己亥孟冬朔、瞻訖於江戸千駄谷別邸中斑竹山房、今暁初霜、夜寒如襲、燈下書之、手殆欲龜也

衡誌

己亥孟冬初八、江戸仙駝谷別邸第一号舎西窓下写了

清瀧山人衡

天保庚子秋八月念七、騰於小川街神保巷寓

清瀧山人衡

天保辛丑抄於牛門外僑居

息軒

天保甲辰十月念五、燈下瞻於振袂坡之寓

息軒衡

即ち順に、天保八年、十年、十年、十年、十一年、十二年、十五年の識語である。また順に芝増上寺、千駄谷、小川町、牛込門外、番町袖振坂にて識されたことがわかる。転々と居を移るなかにも読書の姿勢は一貫して変わることがなかった。

無論、これ以外にも多々抄録したことであろうが、ここに現存するものを内容的に少し整理してみよう。

「周礼義疏」は乾隆年間に編纂された「欽定三礼義疏（周官・儀礼・礼記）」の一つで、「周礼」に特に力を入れていた息軒であったことを物語る抜抄で、卷二の「地官」部分の抜き書きである。「十三経注疏」の「周礼」における書き入れに多く引用されている。

「研經室集」「日知錄」「十駕齋養新錄」「曝書亭集」「雕菰樓集」「論語校勘記・論語補疏・論語述何」「沈歸愚全集・孟子校勘記」は、清朝の学者の著作から経説を中心に抜き書きしたもので、息軒が最も意を得た所の論説と言えよう。「陔余叢考」「明清紀略」等は史書の考証に詳しい清の趙翼の著作で、「春融堂集」は金石家、清の王昶の作である。いずれも名物、法制、事蹟等の細かい考証に、息軒の関心が向けられており、こうした幅広い知識の導入が、経書解釈に考証学的性格を反影していると断言できよう。飽くなき知識の欲求は、清朝の学者のものに止まることはなく、「困学紀聞」（宋代の随筆）「六研齋筆記」「焦氏筆乘」（明代の随筆）などの作者の時代にとらわれないほう大な随筆集や「渭南集」（宋代の文集）「望溪集」（清代の文集）などの文学作品中の「論」や「跋」にも及び、緯書の研究書「古微書」も読破している。

このような抜萃は、読書の備志録という性格のみで結論づけてしまえるものではないという思いを強く受けるのであるが、明人の経説「論語詳解」の抜萃、また「知不足齋叢書」の抜萃は、その思いを一層かきたてるものがある。「論語詳解」は明郝敬の「郝氏九經解」の訓詁よりも義理に長ずる解釈が多

いが、息軒はそれを取捨選択し、整然と一書にまとめ直したもので、九行の刷野紙（十七×十二・五糎）に毎行二十二字で学而篇から堯曰篇まで貫かれた勢いは、まさに、抜き書きというよりはむしろ著作というところえ方の方が適切であるかのように思われるのである。野紙には「愛日樓鈔本」と刷られてあり、佐藤一斎から譲り受けた野紙であろうか。「知不足齋叢書」は清の鮑廷博・士恭の編に係り、三十輯・二〇七種の大型叢書で、内容も多岐に亘り校勘もゆき届いた定評あるものが多い。息軒はここに一〇十五輯（帙）について全て読破して、これはと思うものを抜いている。行字数は不定であるが、上欄に要点の項目を挙げ、更には随所に案語を加えて意見を述べている。言うなれば、息軒批評知不足齋叢書選といった著作とも称しうるものである。いったい、こうした抜抄を、かかる整然とした形で、無駄のない幅広い読書を、後に伝えている学者というのは、江戸時代を通じて他に存在するのであるうか。

息軒はまた遊行記や小説の類をよく好んだ。清、馬俊良編の「龍威秘書」の一〇三集（全十集のうち）は主に唐以前の、清呉震方編の「説鈴」は明清のものを輯めたものである。息軒は、読書もさることながら、作文も得意としたが、後に息軒の漢文

を「古色蒼然」と評される所以は、古典のかたいものからやわらかいものまで自在に吸収していった読書と抄写が大きな位置を占めるのであろう。

「海東諸国記」は十五世紀頃に朝鮮の申叔舟が日本について記した記録。朱彝尊の「曝書亭集」にも言及があり、その文をも抄写しているが、朱氏に刺激されたものか。「江閑筆談」は、やはり朝鮮の趙泰億が正徳一年江戸に新井白石を訪ねた時の筆談録で、談は古文尚書から礼制等に至るまで短篇ながら興味深い内容である。

「粵東義勇檄文」は天保十五年の十月に抄写したものだが、この年は四月に慊堂が没し、また親友藤田東湖が幽閉されたりと、息軒の近辺もあわただしく、読書も社会の動勢を見守りつつということになり、多忙へと変遷していく頃である。隣国の清においても、アヘンの流入によって国害を被っている時、道光二十二年（天保十三年）この檄文が出された。道光帝は湖広総督林則徐を広州に派遣し、外国商人を取り締らせ、イギリスと対立しアヘン戦争となった。不平等条約を余儀なくされた中国の状況を、息軒はわが国に重ねていたに違いない。時勢と人の動きのなかで、しかし、こうして檄文も冷静に出典を求めな

がら読み解く姿勢は、眞実学者たる所以と言えるであろう。

ふり返って、日本のものにも目を通すことは勿論である。

「北窓瑣談」は江戸の漢方医橋南谿（宝暦三年～文化二年・一七五三～一八〇五）の随筆である。「秉燭談」は名家伊藤東涯（仁斎の男）の随筆集。ともに考証にすぐれ、息軒の好む所であった。前者は抄写に他人の手も加わっているようである。

「寿永筆記実」は親友木下犀譚との良き憶い出である。天保八年、昌平校の入寮とともに慊堂宅で、熊本藩の木下氏を知った。その終生の交際は「読書余適」の解説に詳しく述べたが、おそらく知り合ってまもなく、犀譚は、藩に伝わる寿永一年（一一八二）の刻字ある秘宝の「筆」についての記実を示し、興を覚えた息軒はそれを写しとった。両人の交流をほのぼのと感じる一本である。「孤憤抄」は一部他人の筆が含まれるが、当時幕末の、諸外国の日本への意見書を訳したもの等を収める。訓点を施すのは、全く息軒にとって異例のことに属する。いずれにしても「孤憤抄」という題名が息軒の気概を物語っているよう。「淡海奇聞」も第一冊が欠しているが、開国にむかうほどに摩擦を生む幕末の政治状況に関する資料集で、息軒は見聞する状況を丁寧につつしとって分析していたのである。攘夷論につい



て過激に論じたわけではないが、しっかりと時の流れをみつめていた。息軒の眼は、片目ながら実は人の何倍も視界が広く、親友塩谷宕陰が「息軒の眼は平家蟹のようである」とたとえた（『読書余適』七月二十二日の評）如く、本質を見据える深い眼力があった。だからこそ政治の流れの中で、古典の注釈に精力を傾注し得たのであろう。

「温史拔萃」は、宋司馬光（温公）の「資治通鑑」の抜抄であるが、「慶応元 乙丑 七月学海堂主人」と墨書するのは息軒の手ではなく、次男謙助のものであろう。この年息軒は六十七歳。「班竹山房」の刷野紙（十行、十七・五×十二糎）に抄写し、「通鑑」の中から、「考徴・治道・生類……天文・制度……職言・時勢」等二十二の項目にわけて必要事項を抽出しようとする試みで、中途になっているものである。この頃には近辺の子弟に命じて業を継がせることもあったであろうが、字勢は、息軒の固有のものにそぐわない感がある。企画は一種の百家辞典に類するもので、おおよそ、類書というものはこうした作業のつみ重ねのもたらすものなのであるうとの思いを致す。

なお、以上のように息軒が自ら写本を作って読書に励んだものを見るにつけ、「完」字を欠筆しているのが散見されると、

父滄洲の諱朝完を避けて、父に敬意を表している姿が、単なる形式的な諱避ではないとつくづく感じられる。

#### 附 録

次に挙げる写本は、「班竹山房」印記はなく、息軒の手が加えられていないものもある。従って息軒の旧蔵書と断定はできないものもあるわけであるが、内容的にも、また安井家の伝来からも、更には貴重本として保存されて来た点からも、息軒手沢本に準じるものとしてここに扱うこととする。

「内典至要」は、全丁一手で墨書されているが息軒の手ではない。十一行二十三字、天照皇太神詔曰……、三輪大明神託云……等の神明託宣部と孝靈天皇勅曰……、彦五十狭芹彦命曰……等の勅語、大織冠鎌足公曰……不比等公曰……等とその格言的な言辞を輯めたもので、編者は未詳。江戸時代末期の写本である。墨付二十一丁。

「癸亥甲子新聞・長薩異聞」は、癸亥甲子即ち文久三・元治一（一八六三・四）年の長州・薩摩両藩による攘夷決行と英米仏蘭列強の反撃を記した記録である。「長薩異聞」もその間の長州・薩摩の動向を飛脚が伝えた話を記したものである。いず

れもカナ交り文で息軒の手ではない。墨付二十七丁。

「薩英対話」もこの頃の記録である。文久二年（一八六二）の生麦事件以来、険悪な空気をただよわせていた薩摩とイギリスの間で交わされた対話の記録である。あわせて、文久四年の孝明天皇の宸翰と將軍家茂の御請書載せる。これらは全て息軒の自筆で、如何に息軒が時勢に関心を持っていたかがうかがわれよう。二十四×十七糎の原紙を二十七×十九糎の台紙に貼りつけて袋綴にしたものである。墨付三十九丁。

「國疆議案」は幕末の蝦夷地の状態を記したもので、箱館奉行を歴任した堀利熙（文政一年〜万延一年・一八一八〜六〇・安政一年に箱館奉行）と村垣範正（文化十年〜明治十三年・一八一三〜八〇・安政三年に箱館奉行）の撰になる。他人の筆写になるもので、息軒はそれに朱筆の校字・補注を上欄に加えて一読している。息軒は「読書余適」にもその一端が示されているように、地理には細心の注意を払う性格を有している。二十八×十九糎と大振りの紙に上欄余白を十分にとる字面高さ約二十二糎の本文。十校。

「随見抄」は半葉十行（十七・五×十二糎）の藍色罫紙に記した覚書きで、息軒の自筆に係る。顧炎武「日知録」からのもの

のや、天保十二年に記された木下犀譚の「紀西洋船入寧波事」一文等の文会関係のもの、又、天保十三年に抜抄した「窓のすさみ」（松崎観瀾の随筆）等をおさめる。墨付三十一丁。

「閑酒寢覚」は内題に「講武新書」と題する如く、兵法書であつて全七卷。第一冊本文共紙表紙に「講武新書改」とあり、改題したものとみられる。儲古齋紀誠之述と題して著者は儲古齋を号する人である。每半葉九行、字面高さ約二十三糎で、墨付七十六・七十二枚の二冊本。息軒自筆の箇所は無いように思われる。著者を「記」に作る巻もあるが「紀」の誤写であろう。さてこの儲古齋が何人であるかについては暫く後考を俟たなければならない。ところで、「上息軒先生後書」も、儲古齋蔵と版心に記す刷罫紙（十一行・十九・二×十三・五糎）に二十三字詰で漢文が墨書されている（二丁）ものであり、同人の為事であると考えてよいだろう。筆蹟も二書同一とみてよいかも知れない。これは「庚戌稿」と題し嘉永二年（一八四九）、五十一歳の息軒に上つた、明らかに弟子による一文である。憶測する所では、文中に「筑肥」「島原」の語が見えること等から、作者は中村貞太郎にはあらざるか。息軒に「送中村孟達序」（黒江一郎編「息軒先生遺文集」に収載）一文がある、後に北

有馬太郎と称した島原の処士である。天保十三年（一八四二）に入門、弘化四年一八四七頃、帰郷することとなったが、本書は帰郷してまもなくの返信と考えて文意を違わない。中村は安政三年（一八五六）に、塩谷岩陰の仲人で息軒の長女須磨子と結婚、息軒の文には中村をこよなく愛する気持が記され、父息軒の喜びも大きかったが、中村はその後、勤王討幕運動の渦中、文久二年三十五歳で獄死したと伝えられる。安政五年（一八五八）に生まれた男子、小太郎は、後に家学を大成した安井朴堂その人である。儲古齋が中村とどう関わるのかは明らかでないが、この上書は、儲古齋と関わりのある人が清書したものであろう。「閑迺寢覚」には「安井家蔵書」の印記があり、これは朴堂早年の蔵書を示すものと考えられるから、この上書とは筆蹟も似ていることも与って、儲古齋の自筆か否かは別としても、いずれにせよ、二書ともに安井家と深い関わりを持つ写本であるということは言えるのである。

### 第三項 和刻本への書き入れ

和刻本、つまり江戸時代の流布本によって経書を読みこんだ

跡は、また息軒の著作とも密切にかかわるものである。すなわち、「書経」・「詩経」・礼書（「周礼」）「儀礼」・「論語」・「孟子」・「国語」・戦国策」・「管子」であり、そして直接著作とは関わらないものには、「孝経」・「荀子」・「説苑」・「韓非子」が遺されている。唐本への書き入れとも相い輔するものであるが、また勿論、書き入れ本は清武町に所蔵されるものもあるし、安井家から流出して遺されているものもあるわけで、これをもって全体像とするわけではない。テキストはごくありふれたもので、滄洲先生より受け継いだものも多い。総じて言えることは、一本一本のテキストを大切に用いていることと、書き入れは、諸説の厳格な取捨選択という姿勢で貫かれているということである。「書経」には「書説摘要」という著作があるが、各代の解釈の要を摘録したものであって、自説の根拠も必ず引証を示し、考証学的著作であるが、「書経」には若い頃より力を注いだようである。「十三経注疏」の「尚書」には「阮元校勘記」を中心に摘録書き入れし、全巻に朱点を施しているのに対し、和刻本二種のうち「古文尚書標注」（滄洲旧蔵）には宋の蔡沈の「集伝」を主に摘録し、官板の「書集伝輯録纂注」には、「通志堂経解」（清の納蘭成徳編）に収める諸説や清の「欽定書経伝

「說彙纂」の説を摘録書き入れしている。後者は考証より義理に長じた注釈書であるためか、朱点は全巻には及んでいない。著書「書説摘要」はこれら三種の遺された書き入れ本のみに材料を見出し得るものではないが、読書の方向と著作の方向におおよその共通性を見てとれることは確かである。

「古文尚書標注」は明和九年（安永一・一七七二）に宇野東山が「七経孟子考文」（山井鼎）の恩恵を得て、諸本を考じて課本を作製したもので、孔安国の注を本文に添え、上欄に孔穎達の「正義」から抄出したものを備え、音注等も附して読者の便をはかったものである。十行二十字、板框十九・七×十四・五糎、上欄四糎。白口。天明三年（一七八三）の齋新甫の跋があり、同年の江戸・前川六左衛門、平安・風月莊左衛門・今村八兵衛・田中市兵衛四名の刊記がある。書肆の移動はあっても原刻本であろう。この年は滄洲十七歳である。

「書伝輯録纂註」は「通志堂経解」本を昌平校が文化十一年（一八一四）に覆刻したものである。宋の蔡沈の「集伝」に元の董鼎の「輯録」「纂注」を加えたもので、漢代から元代まで幅広い範囲の注を輯めている。十一行二十字、板框十九・二×十三・九糎、白口。

「詩経」には、「毛詩輯疏」という著作がある。「書経」ともに若年より最も力を注いだ経典であるだけに、未完成というのは誠に惜しい。「書経」と同様に、「十三経注疏」中の「毛詩注疏」には専ら「阮元校勘記」を書き入れして全巻に朱点を施している。それに対して、滄洲以来の蔵書二種、「毛詩鄭箋標注」には孔穎達の正義（「十三経注疏」の「疏」部分）を主に書き入れ、「詩経説約」には唐の陸徳明の「音釈」（「十三経注疏」にみえる）や校異を、数少ないが書き入れている。「隆按」とみえるのは棟蔵（息軒長男）の筆蹟であり、先祖三代の手沢を経ているのは誠に興味深い。「毛詩輯疏」は、正義・清朝考証学者の学説が殆んどを占めて、更に按語を加える形となっていることから、「詩経」読書の主体は唐本であったことがわかる。「詩経説約」には滄洲の書き入れが多く、それは文義・章義に関するものである。若年、息軒が父より教えを賜わる様子が目に浮かぶようである。息軒の書き入れも、本書のものが最も古いものに属するであろう。

「毛詩鄭箋標注」は、「古文尚書標注」と同じ宇野東山の編になり、毛伝鄭箋を本文に附し、上欄に孔疏を抄出する形式である。底本は明の金蟠の「十三経古注」本である。両書とも、滄

洲の頃、古注に依ったテキストでは最も簡便な入手しやすいものであった。天明五年（一七八五）の東山自跋を有し、同六年の江戸崇文堂前川六左衛門の刊語が封面に、また自印を捺した奥付もある。奥付には他に須原茂兵衛・藤木久市、京都の今村八兵衛・田中市兵衛・風月莊左衛門の各書肆の連名がある。十行二十二字、板框十六・五×十五・五糎、上欄七・五糎、白口。

「詩経説約」は、明の顧夢麟（明万曆十三年～永曆七年・一五八五～一六五三）の原撰を楊彝（万曆十一年～永曆十五年・一五八三～一六六一）が参訂したもので、朱熹注を中心とし、広く漢唐の説や明代の説を合わせ自説を加えたもので、明人に特有の総合的な集説本である。明崇禎の張氏識簾居刻本を江戸前期に覆刻したもので、原刻本は既に稀見に属する。無界の十行二十五字、板框十九・五×十四糎で白口、版心に「織簾居」と。崇禎十五年（一六三八）の顧氏原序あり。原封面に呉門張州籟梓とある。卷十三以下を欠いているので江戸の刊年は不明であるが、後印本で、滄洲父子が印刷不鮮明な箇所はよくなぞって補っている。

礼書については著作は成らなかつた。しかしその読書に傾けた精力は、書き入れの多さからも見てとることができる。弟子

達の間では、息軒先生のこの書き入れを珍重し、それを抄出して先生の著作と為す風があつた。すなわち「周礼」の書き入れを「周礼補疏」、「礼記」への書き入れを「息軒先生礼記説」と名付けて一書と為していたのである。「十三経注疏」の「周礼注疏」への書き入れは、十三経中最も多い量とみられるが、やはり「皇清経解」中の諸説、とりわけ「阮元校勘記」、段玉裁「周礼漢讀考」等を中心として、また自説の按語も他経に勝る量と言えよう。「欽定周礼義疏」もまた多く引用される。和刻本「周礼」への書き入れは卷九「地官」までであるが、殆んどが「賈云」つまり賈公彦の疏を引用するものであり、総じて「周礼」一書はこの「十三経注疏本」と「皇清経解」に集約していると言える。思うに、天保間、最も充実していた読書期の最も大きな収穫は、礼書にあつたであろうと想像する。

和刻本「周礼」は、明の金蟠「十三経古注」本の覆刻で、寛延二年（一七四九）の刊刻になる。はじめ江戸の前川六左衛門と京都の植村藤右衛門等三肆の合刊であつたが、後に京都は植村・風月・内海・吉原・勝村の五肆となつて刊記が変えられる。本冊はこの後印本に属し、植村玉枝軒の蔵版目録を末に附することから植村が版權を所有していたものである。左右双辺に九

行二十五字、版框十九・五×十二種、白口、版心に「永懷堂」  
(金蟠の齋号)とある精刻本である。句点のみを刻し訓点を刻  
さない。

「儀礼」については「儀礼章句」の項で説明した通りである  
が、この和刻本の「儀礼」は全巻に亘って周密な書き入れを有  
し、首に「通計二百六十九葉」と墨書する所からも察せられる  
が、丹念に読み込んだ一本である。要するにこれで「儀礼」の  
学習を終えられる完全な一課本と称することができよう。引用  
は賈公彦の疏、元の敖繼公「儀礼集説」などが中心である。本  
版は、宝暦十三年(一七六三)、京都の山田三良兵衛・山本平  
左衛門の合梓に係るが、河野恕齋(子龍)が校訂して同十二年  
に序を撰じたものである。子龍は岡白駒の子で神童の名を得た。  
この年わずかに十九歳の青年であった。恕齋もその序の中で、  
元敖繼公の著書は発明する所が多いとしている。また、首に明  
の鍾人傑の序文を附す如く、本版は明嘉靖間徐氏仿宋三礼本を  
鍾氏が明末に重刊したものを底本としている。左右双辺、九行  
二十字板框十九・五×十三・五種、白口。

「礼記」は前述のように、「十三経注疏」本には阮元の「校勘  
記」を中心とした書き入れと、全冊に亘る朱の句点が施されて

いるが、和刻本は遺っていない。この書き入れを抄出した「息  
軒先生礼記説」については後述。

「論語」には「論語集説」という名著がある。成書の姿勢は、  
魏の何晏「集解」を中心として、梁の皇侃「義疏」を多く採用  
するのが特徴的である。和刻本で安井文庫中に遺された息軒手  
沢本はこの「論語義疏」のみであって、ここには、巻六「先進」  
以下に多くの書き入れを存す。邢昺の正義はもとより宋朱熹の  
注から清朝考証学者の説、荻生徂徠・伊藤仁斎の説等、幅広く  
引用して按語を加えている。実は斯道文庫が後に購入した和刻  
本の「論語注疏」(享和一年京都植村藤右衛門等刊本)に、門  
弟が班竹山房にて「論語」への息軒の書き入れを安政四年(一  
八五七)に臨写したものが存在している。書き入れの内容はこ  
の「義疏」へのものと共通するものが多いけれども、この移写  
は全巻に亘っているため、班竹山房には他に書き入れのあるも  
のが存していた。

この「論語義疏」は左右双辺九行二十字板框二〇・二×十三・  
五種、白口。首に寛延三年(一七五〇)の服部南郭の序、末に  
皇侃の原叙を載せる。寛延三年の奥付は初印のもので、藤木久  
市・奥村喜兵衛・前川六左衛門・伏見屋善六の四肆が挙げられ

ているが、前川氏がおそらく主力であったと思われる。うすい縹色表紙に「論語義疏 幾冊」という刷題簽があり、「論語集解義疏」という題簽を持つ印本もあるが、ともに初刷のものである。

「論語」は無論、「孟子」についても幼学の頃から親しんでいた書物であるから、後に精力を尽して句点を入れる風の読書は必要なかったであろう。中心は「皇清経解」の「孟子正義」（焦循撰）等であったが、和刻本では一点、「孟子集注」が遺されている。これには「班竹山房」印記がないが、書き入れに用いる出典は皆、焦循等の清人の考証であって、按語も多い。「嘉永三年庚戌仲冬念四月卒業 衡誌」と末に見えることから、息軒五十二歳の読書であった。著作、「孟子定本」は結局未刊に終わり、後年、「漢文大系」に収録されたが、古注を中心として、朱熹注も参考に資しているこの著作の原点の一端をここに見ることができるであろう。欄外への書き入れは周密である。「明治六年十一月衡再誌」の識語等も見え、自説を加え続ける晩年までのためまぬ読書が、見る者に感動と驚きを与える。自らの解釈の得る所を確かに書物に加え遺していく、こうした実践と実力は、書物を愛し、書物に依って、書物に注ぎこんでい

く充実した学問の形を、集約的に、後学の者に伝えているようである。

本版は八行十七字、板框十五×十二糎、白口、句点のみを刻す。末に明和三年（一七六六）、京都勝村治右衛門の求版の記が刻されるが、流布本ながら求版以前の刊記を見たことはない。「戦国策」には「戦国策補正」という自著があり、未刊のままとなっていたものを「漢文大系」に朴堂が収載した。「書経」「春秋左氏伝」等先秦の歴史に深い関心を示していた息軒は、春秋時代の「国語」や戦国時代の「戦国策」には精力を傾注していた。「国語」は滄洲以来の旧儲で、「戦国策」は「班竹山房」大印を捺すことから息軒中年以後の購入に係るであろう。この「戦国策」は明の張文燿の編になる「戦国策譚概」<sup>だんさう</sup>で、明万曆頃の刊本を覆刻したものである。それは、宋の鮑彪が伝えたテキストに元の呉師道が再編を加えた校注本を底本として、更に諸家の評語を頭注にまとめた一本である。「戦国策」は先行の研究が少ないために、息軒の書き入れは自らの按語のみであるが、息軒の最も重んじる所である清の考証学者の成果は、漢の高誘の注本に依って、黄丕烈が嘉慶年間に校刻した仿宋刊本とその札記であり、息軒は何処からかこれを借用して参校し、

「戦国策補正」を著している。そしてこの和刻本への書き入れはその著作に直接つながるものである。本版は十行二十字で板框十九×十四・五、上欄三・五糧、白口。封面に「日本平安書林 翻刻」とあり、奥付には京都の積文堂大文字屋与三兵衛と大坂の積玉圃河内屋喜兵衛の二肆を記す。文政年間に横田惟孝の「戦国策正解」が出ている他は、日本ではテキストの流伝も研究も少ない。

「国語」は、日本でも比較的よく読まれたようで、林羅山の点本や名古屋の儒官秦鼎の「国語定本」は文化年間以後流布していた。息軒は本書について著作をまとめることはなかったが、「戦国策」と同様に、清の黄丕烈が宋版を覆刻し、校異札記を著していた考証学的成果があったので、これに傾倒していた。このテキストは、「天聖七年（一〇二九）七月二十日開印 江陰軍郷貢進士葛惟肖再刊正 鎮東軍権節度掌書記魏庭堅再註 明道二年（一〇三二）四月初五日得真本凡刊正増減」という原刊記を有する所謂「天聖明道本」であり、清嘉慶五年（一八〇〇）に黄丕烈が校刻、時を殆んど同じくして文化一年（一八〇四）に江戸の葛氏上善堂が黄氏本を覆刻しているものである。葛氏上善堂が何人かを詳らかにしないが、あるいは山本北山や

片山兼山の流れに属する人であろうか。滄洲の収集に係るところが奥ゆかしい。

息軒の書き入れは按語が多くを占め、「皆川伯恭云（皆川淇園）」「渡蒙庵（渡辺蒙庵）」「関修齡（関松窓）」「冢田虎（冢田大峰）云」「秦（秦鼎）云」「洪井（洪井大室）云」等邦人の説も引用される。天保頃かそれ以前の読書であろうかと推察する。本版は左右双辺、十一行二十字内外板框二十・五×十三・五糧、白口。封面に「嘉慶庚申読未見書齋重雕」と原刊記を、「札記」の末に同様の木記と、「文化甲子仲冬江戸葛氏上善堂蔵版」の木記がある。錢大昕・段玉裁の原序を首に冠し、奥付に「攷證補遺 続刻」と刻す。

「管子」には「管子纂詁」という息軒の著作が遺るが、そもそも「管子」の読書は弘化一年（一八四四）に藩主祐相から本書についての質疑があったことから本格化したものと思われる。春秋時代、斉の桓公が管仲の助言をもとに天下の覇者となった史実から、明君であった祐相もこれに習い、息軒に古代中国の政治観を学ぼうとしたものである。息軒は考証学という地道な学問を志す一方で、学問で得た智慧をより実践に移すべきであるという志気にも富んでいたために、「管子」の研究は最も意



を得たものであった。「読書余適」にもこうした息軒の姿勢はよくうかがいとれるのである。

「管子」は伝本も少なく、研究書もさ程多くはない。宋刊本を除けば明に幾種かの版本が伝わり、趙用賢が校刻したもの、劉績が注を補ったもの、更に朱長春や張榜といった、いずれも明人の評訂を経た坊刻本が伝わるだけである。江戸時代に出版されたものは明の劉績の増注本で「管子全書」と題するテキストを覆刻したものがあるに過ぎない。息軒が読んだ「管子」も、この一本であり、上欄に按語を多く書き入れ、また猪飼敬所の説（「管子補正」寛政十年刊）冢田大峰の説（「管子賤注」文化二年刊）、を引き、「群書治要」や趙用賢本や古本（昌平校に所蔵されていた元（明？）刊本）などを採って校勘し、「管子纂詁」の源流となる課本を形づくっている。

本版は、武田梅龍（美濃の人、伊藤東涯等に師事、明和三年Ⅱ一七六六、五十一歳で没）の訓点で、宝暦六年に京都の林権兵衛・葛西市郎兵衛・山田三郎兵衛・梅村彌右衛門の四肆の出版に係る。外題・封面に「管子全書」と題し宝暦五年の武田氏序、明天啓の朱養純・沈鼎新の序、郭正域・趙用賢の序、朱養和の凡例、また司馬遷の管子伝を首に附し、九行二十字十九・二×

十三・四糧、上欄二・八糧、白口である。

次に、直接著作とは関わらない書き入れ本をみると、「荀子」に比較的多く書き入れがある。諸説を引くことなく、按語のみであるが、所蔵の「荀子箋釈」は清の謝墉が善本を校して刻した最良のテキストで、息軒にとっては申し分のない読書の対象であった。それ故にあまり自身、考ずることを必要としなかったものと思われる。乾隆五十一年（一七八六）の刊本を文政十三年（一八三〇）江戸の朝川善庵が覆刻し、平戸藩の維新館に版を蔵したものである。封面に「平戸維新館蔵」とあり、謝氏序、朝川氏序、また宋本の刊語列銜等を首に附し、末に校勘記を加えて錢大昕の跋文を添えている。江戸の西宮彌兵衛等三都の七肆の奥付があるが売り捌きの店舗である。左右双辺で十行二十字、板框十八・二×十二・一糧、白口。版心下部に「嘉善謝氏蔵版」と。訓点を刻す。後表紙に「慕楠樓蔵」と墨書するのは、息軒の長男棟蔵であろう。文久三年（一八六三）二十一歳で没したが、特に「荀子」に力を傾けたとみえて、本版にも書き入れがみえ、更にもう一本、滄洲先生旧蔵の「荀子全書」にも少々手入れがある。こちらの書き入れは、あるいは息軒のものではなく、全て棟蔵のものであるかも知れない。「荀子全書」

は荻生徂徠の覆刻に係るもので、まさしく滄洲の推奨する所であった。明嘉靖間の世徳堂六子本の覆刻で、双辺八行十七字板、框十九・五×十三・二、白口、版心下部に刻工名（宅・需・方……）を刻す。句点のみを刻する白文である。封面に「荀子全書」「平安書林 翻刻」とあり、延享二年（一七四五）清田儋叟、享保十年（一七二五）徂徠の序、また唐楊棟の原序を附し、末に葛応禎の刊語、延享二年、葛西市郎兵衛好廷の刊記がある。

劉向の「説苑」にも息軒の書き入れがあるが、これに関する著作はない。本書のような古代の史実を題材にした教訓書は息軒の好む所であった。通読して各所に按語を加えているが、それはむしろ史実に対する考証や訓話に関するものが多い。「明治庚午冬十一月 衡再誌」とみえるから、明治三年（一八七〇）七十二歳の読書に係るものであった。あるいは壮年の頃、一読を経たものかも知れないが、朱点や字勢等、晩年の書き入れに似る。本書に捺す「班竹山房蔵書記」の印は晩年に用いたものである。

本版は尾張の儒員、関元洲（文化三年五十四歳で没）の注釈書で、寛政六年（一七九四）の出版。外題は内題と同じで封面

に「興藝館蔵」とある。寛政六年の細井平洲の序、明嘉靖二十六年（一五四七）年の何良俊の序、宋の曾鞏の序を首に冠し、巻首に「明新安程榮校」と題する如く、明程榮の漢魏叢書本を底本にして小字双行と上欄の注を加えたものである。十行十九字で板框十八・五×十四・二、上欄三・二、白口。訓点、傍点を附刻する。寛政五年の岡田新川（尾張儒員）の跋があり、末に名古屋の書肆永楽屋東四郎の製本目録を附している。

「孝経」は滄洲以来の蔵書を用いた読書でこの息軒の書き入れは、おそらく若い頃のものであろう。字も大きく堂々とした書き入れで、息軒の書き入れらしく、「今文・刊誤本・開元注本・董鼎本・直解本」など各種孝経のテキストとの異同勘案を主とし、「兼山（片山兼山）曰」などの説も引用している。孝経のテキストに就いてここに詳説はしないが、息軒はこうした諸本を、昌平校において一見したものと思われ、理論ではなく実際に原本に就いて比較勘案する学問の姿勢は、まさしく考証学者の王道を踏むものであったと言える。

本版は、享保十七年（一七三二）に太宰春台が校刻した「古文孝経」で、「四庫全書」にも取り入れられた日本儒学史上の記念碑的テキストである。九行十八字白口で板框二十・三×十

三・八糶。奥附に「寛政六年甲寅十一月再板」とあり、江戸書肆嵩山房小林新兵衛による享保以来版を重ねた覆刻本である。

最後に「韓非子」であるが、書き入れの無い息軒の旧蔵書である。本版は封面にある如く、弘化二年（一八四四）に朝川善庵によって覆刻された「乾道本韓非子」である。清嘉慶年間（十九世紀初）に呉肅が宋乾道一年（一一六五）刊本の影鈔本を覆刻し、その際に顧千里に校勘をせしめたという考証学の粹とも言ふべき善本中の善本である。朝川氏にしてはじめて能くなしうる覆刊であり、その子、片山述堂とともに片山兼山の流れを汲む（朝川氏は兼山の子、述堂は朝川氏の子）古学派であり息軒もまた滄洲以来、重んじる所であった。弘化二年朝川氏序、嘉慶の呉氏序、宋乾道の刊序（乾道改元中元日黄二八郎印）を首に附し、顧氏の「識語」二巻を末に附す。十三行二十四字、板框十七・九×十二・七糶、線黒口。句点、訓点を刻し、上欄に校異を記す。「中島氏／蔵書印」「秋山」印記あり、息軒の前の所蔵者である。弘化二年は息軒四十七歳、つまり、息軒後年の蒐書に係ると言えよう。

#### 第四項 師友と蔵書

息軒の蔵書のなかに、満紙の書き入れの跡を遺す読書の書物と並び、特徴ある一群を成しているのが、師友に関するものである。師とは言うまでもなく松崎慊堂で、友人には塩谷宕陰、砂川由信など昌平校での朋友や水戸学、彦根藩などに関わるものである。

慊堂と息軒に就いては、「読書余適」の解説にも記したが、天保年間、息軒の最も充実した読書生活の支柱となった慊堂の人となりと学問は、精審な考勘学という緻密な学術として、息軒のみならず当時の若い儒者たちを崇敬させてやまなかった。そのライフワークであった儒家の經典「十三經」の校刻は、彼らにいいよ学問の意欲をかきたたせる大事業であったわけで、ここに遺される「五經文字」「九經字樣」は、「周易・尚書・毛詩・周礼・儀礼・礼記・春秋左伝・公羊伝・穀梁伝・孝經・論語・爾雅」とともに上梓されたものの一節である（孟子は未刻におわった）。前者は唐の大曆十一年（七七六）、後者は大和七年（八三三）の制定で、いずれも当時の経書テキスト中の文字

を考訂解説したものである。息軒もこの事業に関わること大であったが、これら全てを所蔵しているわけではなかった。「九經字様」に附される憊堂の跋によれば、掛川・肥後新田・西條・佐倉の各侯が刊費を負担、この二書は佐倉侯によるものであった。この時が天保十五年（一八四四）。先に息軒は憊堂の介で佐倉藩に儒官となっている（天保十三年）。この「十三經」の校刻に就いては別に專論を為さなければならぬ。本版は、二八・八×十九・八糎の大判で板框は縦二十三糎で片面五行小字十八字内外の体裁である。

憊堂はまた善本の覆刻・翻刻に心掛けた学者であった。天保十一年（一八四〇）には、「陶淵明文集」を刻し「三謝詩」を附して合印している。「三謝詩」はそれ以前の上梓に係る。二八×十三・六糎の瀟洒な小型本で、淵明小像を冠し封面に「縮臨治平本陶淵明集付三謝詩」「羽沢石經山房刻梓」とある。天保十一年の林述齋（大学頭で憊堂の師）の序（巻菱湖書）を加え、梁昭明太子の「陶淵明文集序」、末に北齊の楊（陽）休之、宋の宋庠の跋、宋治平三年（一〇六六）の思悦の跋、紹興十年（一一四〇）の刊語を附し、この宋版の影抄本を所持していた清の毛扆の康熙三十三年（一六九四）の跋文をも附す。最後に

天保十一年の憊堂の長文跋がある。「三謝詩」は「文選」の宋尤表刊本からこの部分のみ抽出したもので、末に「題三謝詩後」（憊堂撰）がある。いずれも単辺無界に九行十五字で返り点を刻し、板框は十二・八×九・一糎。線黒口。「班竹山房」大印は息軒の最も意を得た書物への印記であつて本書も憊堂より直に賜つたものであろう。

もう一つの影宋本に「爾雅」がある。これには「班竹山房」の印記は見えないが、朱点や一条の書き入れが息軒のものと同断され、憊堂より贈られたものと考えられる。本版は憊堂の跋によれば「此本係北宋仁宗時刻版南宋高宗時補刊」とし、「敬驚弘殷匡胤玄朗恒楨貞楨徵」を欠筆し、補刊葉には「朱諒重彫」等と刻工名に重刊の意を記し、更にその補刊葉は「桓邁」を欠筆、原刻葉は欠筆しないことをその例証としている。四部叢刊に収める宋紹興刊本とは、版式を同じくする別版で、刻工名も異なる。原本は亡友狩谷掖齋（天保六年卒）が京師大医某君から借鈔したものであるという。更に宋蜀刻本を覆刻した五山版やその他の諸本も参勘して憊堂の「校譌」を附刻している。天保十五年（一八四四）春七十四歳の跋文があり、憊堂はこの四月二十三日に没している。本書の覆刻には沼田藩土堀田筠庭の

出資や慊堂晩年の高弟渡辺樵山・山井璞輔兄弟の力に与ったところが特に記されている。封面に「羽沢石経山房刻梓」とある。左右双辺十行二十字内外、白口、板框二十一・一×十四・五糎、刻工名（江通・陳忠換・施蕩・洪先・洪茂・施章・朱因換・方成・施陳等、重刊に胡端・劉昭・洪乘・朱諒等）。

慊堂の旅記にも息軒は影響をうけている。文政二年（一八一八）、慊堂は東北に松島や岩手を旅し、「游東陬録」を著している。息軒は後に殆んど同じ行程を旅して「読書余適」を著した。いかに慊堂を慕っていたかが遊記の文勢を通してもうかがい知ることができる。本書は「慊堂文鈔（以下墨訂）」と内題を作り、掛川藩が文集を編もうとしたものの一端となっていた。掛川儒臣海野豫の校を経、「掛川徳造／書院刻梓」の印記を捺している。左右双辺十行十八字、白口。板框十六・六×十二・六糎。

この恩師、慊堂を紹介してくれたのが昌平校以来の最も親密な友であった塩谷岩陰であった。二人の間柄に就いては「読書余適」の解説に記した通りで、ここに遺る「岩陰存稿」は慶応三年（一八六七）八月に没した岩陰の遺文を明治三年（一八七〇）、息軒七十二歳の時に手にしたものである。晩年の印記

「班竹山房／蔵書記」は、若かりし頃の学友を憶う万感が迫り来るようである。同じ慶応三年七月に親友の木下犀譚も世を去っている。

封面に「晚香廬蔵」とあり芳野金陵の序、岩陰の弟の簀山の「行述」を首に冠す。慶応三年に開板、明治三年に上梓している。山城屋政吉等五肆の奥付がある。双辺九行二十字白口、板框十七・二×十二糎。

師友に属するかは不明であるが、砂川由信の著作が三部初印本で遺っている。三種とも同じ紺色の表紙で刷題簽に「天保新刻」「嘉永新刻」（大学章句・格物弁義）と刻す。封面も同じく「温故斎蔵板」とある。「大学序次考異」「大学章句講本」「格物弁義」の順に天保十二年（一八四一）、同年、天保十三年の成書である。版式も同じく双辺無界十行二十字（講本は八行十七字）黒口、板框十九・二×十四・二糎。書肆は、「考異」が大坂赤松九兵衛、他二書は大坂松雲堂清七で、「講本」は更に奥付に三都並びに長崎岡村屋利兵衛、徳島紀伊国屋三右衛門等も販売肆として加わる。版本調査は「江戸時代刊行邦人撰述学庸注釈書類簡明目録」（本論集十九・大沼晴暉）を参照していたきたい。大綱は宋朱熹の学説を主とするものである。「論語

集註講本」等、外にも砂川氏の著作の目録が附載されているが、伝本は見られない。砂川氏は本姓物部氏で淡路の人であるが、それ以外のことは不詳である。息軒にまとめて贈書しているから、何らかの関係があつたのであろう。息軒の書き入れはない。

「文苑遺談」は水戸の青山拙斎（天保十四年六十八歳没）の著で、水戸藩儒の列伝である。息軒は藤田東湖と密接な友であつたこともあり水戸学には非常に関心があつた。本書の架蔵もその経緯からであろう。封面に「鉄槍斎活版」とあり、木活字印製である。九行十九字、白口、板框十七・四×十二・五糎。日本儒学史を考究した朴堂の書き入れがある。

「李西涯擬古楽府」は明李東陽の楽府集で、真下晚菘（穆）の校編になる。安政四年（一八五七）の跋があり、首には湖山楼主人（小野湖山＝豊橋藩儒）の同年の序がある。それによれば頼山陽も本書を愛読しており、詩家必読の書であると。封面に安政五年の年記と「遊焉唫社藏梓」とがある。即ち小野氏蔵版。版心に「聯腋書院擺刷」とあるが、これは後述の田口文之の書齋号である。このころ同様の活字を用いて、外に「陸宣公奏議」なども出版している。十一行二十字、黒口、板框十六・五×十・五糎。二十五丁。薄冊であるが感じのよい風流な一冊

である。息軒の朱点がある。おそらくは、小野氏や真下氏が息軒の文会に赴いて贈つたものであろう。

「逸周書」は周代の記録であるが、息軒が特にこれを考究したわけではない。本邦にこれを刻するものもなく、ただ清の盧文昭が校訂した抱經堂本が伝来するぐらいであつたのを、彦根藩文学の西郷義が盧本を翻印した。息軒は「左伝輯釈」の上梓を彦根藩主井伊家の出資に依つたこともあり、晩年、彦根藩とは浅からぬ縁を持つていた。その縁から所蔵したものであろう。本版は左右双辺、九行二十字、白口、版框二〇・八×十五・一糎。末に「逸周書校正補遺」（盧文昭撰）を附し、文政九年（一八二六）の西郷氏跋、天保二年（一八三一）彦藩弘道館活版との刊記があり、木活字印製である。「弘道館藏板」の朱印がある。書き入れはない。

「太平御覧」は、安政二年（一八五五）から文久一年（一八六一）の木活字本で大冊であるが、田口文之が校勘に加わっていたこともあり、文久二年には息軒も將軍の謁見を賜い、昌平学儒官として地位を確立したこともあり、おそらくは田口氏を介して贈られたものではなからうか。田口氏は、息軒が安政六年に著わした「故旧・過訪・遊従・及門録」の遊従の項目に

筆頭として見える人物で、「処士・名文之・字文蔵・号江村」と記されている。遊従は「皆忘年友也」という。三計塾、文会の常連で、安政初に蝦夷地の経営に当って息軒は田口をこそ遣るべきだと語ったことが若山甲蔵「安井息軒」に載せられている。余程、息軒の意になつた人物であつたらしい。その外の事蹟に就いては詳らかにしないが、明治六年（一八七三）六十歳で没。幕末の処士にはこうした学ある人で伝の広まらぬ人が多いことである。本書の翻刻を主宰した喜多邨直覚の詳細も今明らかにし得ないが、あるいは書物に詳しい幕府医官の多紀氏や小島氏に関わる人であろうか。その文久一年の序によれば、本版は、昌平校所蔵の宋版の影写本を翻印したもので、田口・喜多邨の兩人が校勘して挙論（校記）を著わした。その影写本の原本は、金沢文庫旧蔵の宋慶元五年（一一九九）蜀刊本で（末にその刊行原跋を附している）、現在も宮内庁書陵部に伝わる。またその影写本も内閣文庫に遺されている。本版の版式は単辺、十三行二十二字、板框十八・五×十二・七糎、白口で刻工名をも刻す。封面に「安政乙卯倣宋槧校江都喜多邨氏学訓堂聚珍版」と記す。文久一年の序は名工木村嘉平の刻字に係る。末に「岡崎中根鳳督刊」とあるのは活字印刷の管理者を指さう。

「宋槧太平御覧」とやや細めの刷題簽や茶色の刷毛目表紙は、幕末の、書誌学の隆盛を顕わした流行によく沿った地味な雅を強調している。卷一百四十八に少々息軒の書き入れがある。「班竹山房」大印は鮮やかに本版と調和適合している。

「集古帖」は日本古来の名筆を模刻したものの拓本集で、醍醐天皇を始めとする宸筆、空海、橘逸勢、菅原道真、小野道風、仏像の背記、鐘銘等著名な筆蹟を集めたものである。岩手南部藩の北条氷斎とその叔父高橋元吉が寛政年間（一八世紀末）に編纂した。息軒は碑帖に関心があつたわけではないが、天保十三年に東北を旅した際に見聞した「多賀城碑」について、「読書余適」の中で特に考証しているのであって、本書の巻五に収める本碑を参攷する為に所蔵したものであろう。「集古統帖」の北条氏跋にこの碑を収載した経緯が記されている。緑色の絹表紙（二十九×十四糎）に「集古帖卷第幾」と端整な墨書外題がある。

## 第二節 著書

ここに著書という項名をたてるのは、やや息軒の学問の本旨

とずれる印象を帯びるかも知れない。息軒の学問は、最も解説に困難を伴う古典籍を、先人の妥当な説を採用しながら、自説を加えて、より読みやすく字句の具体的な意義を理解できるようにまとめる、一つの課本を定めることに中心が置かれていたからである。そしてその経籍を身に体して、実践行動に移す人間を育成していくことにあつたと考えられる。

従つて、哲学的な議論でなく、より即物的な議論、実証的な正解を目指すものであつたから、編纂する書名にも、「摘要」「輯疏」「輯釈」「集説」「定本」「補正」「纂註」という言葉を用いているわけである。

そして、諸説の主要なものは漢・唐の古注と清朝考証学の解釈であつた。それらを摘み、輯め、集める能力こそが息軒の学問の真骨頂であつたと言え、当時の學術に特異な光を放つた存在であるゆえんとも言えるだろう。

## 第一項 書 經

書經の注解書は、「書說摘要」という書名の注釈書である。

漢の馬融・鄭玄の説を基本に据えて、孔安国の伝、宋の蔡沈の

注もまま採り入れ、清朝考証学の江声「尚書集注音疏」、段玉裁「古文尚書撰異」、孫星衍「尚書今古文注疏」を中心に、自説もまじえて注釈を展開する。大正十四年（一九二五）安井朴堂が家蔵の息軒自筆原稿をもとに「崇文叢書」の第一に翻刻した。その際の跋にいう。

書說摘要四卷。王父息軒先生所著。家蔵稿本有二。一文久

元年端午日起筆。此為初稿本。一慶応四年四月四日起筆。

此為再訂本。二本互有詳略。立説亦弗能無異同。而塾子伝

鈔者。多係初稿本。是以伝本亦分為二。或至生真贋之疑。

大正乙丑夏。崇文院有叢書刊行之舉。因出再訂本而入刻焉。

摘要多準闡馬鄭。參以江段二家之説。而於偽孔蔡氏。亦往

往有所采。蓋持平之見矣。顧今士子誦習者。大氏偽孔蔡氏

而已。二家苟且取弁。訓詁名物度数之説。膚淺尤甚。学者

就是書。反覆研精。則於尋求古学之淵源。其庶幾于有所獲

乎。大正乙丑八月 安井朝康敬識

ここに概略が述べられているように、再訂本をとって翻印したということである。今、安井文庫に遺されている稿本は、ここに言う初稿本と再稿本（いずれも息軒親筆）、再稿本の転写本で崇文叢書の底本としたもの（欠卷三）、更に再稿本の転写本



で卷二のみを存するものが二種類、以上四種類である。後補表紙によつて皆整えられているので大きさは一様で二四・五×十六・五糎。自筆本は十行二十字小字双行、字面高さ約十七糎。転写本は崇文叢書の底本が十行二十字（十五字や二十一字不等）、小字は二十字や三十字で不等、字面高さは約十七糎。他の二種の転写本は八行二十字で小字双行、字面高さ十八糎である。

初稿本は「書説摘要卷之一 飢肥安井衡 著」と題し「書説摘要卷之一終」と尾題を作り、卷二以降は「之」字が無い。卷

一は堯典から甘誓、卷二は湯誓から洪範、卷三が金縢から無逸、卷四が君奭から秦誓、という分巻で、再訂本とはやや異なる。

卷一首に「辛酉五月（五月の二字墨抹）端午起草」とあり、文久一年六十一歳（翌年幕儒となる）の起草であった。墨抹・搜入・刪定が多く、未定稿の姿が明確で、全冊に朱点を施し、同じ朱で訂正の指定を行なっているが、「此二序注改正居半、今未暇浄写、他日当照所改浄写」等と記す所があるように、校定の途次にあると言えよう。

再稿本は、初稿の訂正がほぼきれいに整理された整然とした写本である。「書説摘要卷一」と題し、卷四まで同様である。

撰者の「飢肥」は「日南」に変えられている。全巻に朱点をう

ち、校字並びに若干の追補が加えられている。維新の混乱を避けて戊辰（一八六八）の年三月十三日に埼玉県の領家に移住した折の勉強であった。時に既に古稀を迎えていた。各巻末に次の識語が記されている。

卷一首 戊辰四月四日起筆於領家村之僑居

同 末 四月晦卒業是月小建

卷二首 戊辰閏四月朔起筆於領家村之僑居

同 末 戊辰閏四月十四日卒業

卷三首 戊辰閏四月望起筆於武州足立郡領家村寓居

同 末 戊辰閏四月二十五日写完於領家村寓居 息軒

卷四首 戊辰閏四月二十五日停午起筆於領家村寓居

同 末 戊辰五月七日卒業時江戸未平猶淹留於領家村花井里

三箇月余りで浄写を終えている。全体で一百八十六枚であるから平均すると一日三枚ということになり、一字一字力のこもつた丁寧な勢いを鑑みると、その学問への真摯な熱意を感じ取るのである。全体の次序は初稿本と異なり、卷一が堯典から禹貢、卷二が甘誓から大誥、卷三が康誥から君奭、卷四が多方から秦誓までとなっている。

再稿本の転写本のうち、朴堂が翻印に際して謄写せしめた一本（三冊本）は朴堂が自身で朱の校字を施し、返点を加えている。巻一が三十七枚、巻二が四十七枚、巻四が四十三枚である。外に巻二のみの転写本二点は、別筆の書写で、一方は朱点を加え、一方は白文のままである。それぞれ五十八枚、五十九枚である。

## 第二項 詩 經

詩經の注釈書は、未完となった「毛詩輯疏」の稿本が遺っているが、本書は息軒もつとも晩年の成稿に属するものである。昭和七年（一九三二）から十年にかけて「崇文叢書」第二輯に安井朴堂が訓点を施して翻刻したが、これも朴堂最晩年（七十五歳から七十八歳、昭和十三年八十一歳で没）の編纂に係るものであった。

「詩經」の解説吸収は、それ自体難解な為事であるだけに息軒にとつてはやりがいがあり、解釈もそれだけ深みを増しているようである。「讀書余適」にもその一端を示しているが、經文の明解さに於いて当時の学者を凌駕していた。古注派である

息軒は、漢毛亨、鄭玄の注を中心として、江戸時代も主流であった「詩經集伝」や「詩經大全」等の宋・明の理学を主とした読書とは一線を画していた。参考に資するのは、唐孔穎達の「正義」であり、清朝考証学の粹である「皇清經解」所収の、「毛詩稽古編」（陳啓源）・「毛鄭考正」（戴震）・「毛詩故訓伝」「詩經小学」（段玉裁）・「毛詩補疏」（焦循）・「毛詩紬義」（李黼平）等であった。なかでも、息軒は焦循の当を得た穏やかな学説に感ずるものがあり、それに範をとって本書に「毛詩補疏」と題することも考えたようである。首に「四庫全書総目提要」を挙げ、国風が巻一―七、小雅が巻八―十一、そして巻十二に大雅文王之什の文王有声章までを収め、それ以下は未完成になっている。

安井文庫に遺される稿本は、明治四―六年（一八七一―三）に浄書された自筆の再稿本とその転写本数種である。初稿本と思われる自筆本については、宮崎県清武町に所蔵されている。

この初稿本に関して先に説明しておこう。安井文庫本に共通する後補の茶色表紙はなく、仮綴の本文共紙表紙（二十五×十六・五糎）に「毛詩輯疏 卷一（一―八）」と自筆外題を有する。巻頭は、「毛詩輯疏卷一／安井衡著」と題し、一格を低して

「四庫全書総目提要曰……」と引用、「周南関雎故訓伝第一」陸徳  
故今

明云……」次行に「毛詩国風陸徳明云……  
韓三家故……」更に改行して「周南之

国十一篇……」とあつて、関雎三章がはじまる。この巻頭の割

注は再稿本と異なり、再稿ではかなり整理を加えたものである。

十行二十字で字面高さは約十七糎。上欄に批注を加える。巻だ

ても再稿本と異なり、巻八（小雅魚藻）まで存している。第一

冊首に「斑竹山房」大印を捺している。

再稿本は、搜入訂正はかなりあるものの、ほぼ定稿に近い形

を示している。後補茶色表紙（二十五×十六・五糎）で本文共

紙の原表紙を包む。原表紙には「毛詩輯疏 卷幾」と自筆で書

し、また「明治幾年起草」と朱墨で記している。このうち巻四

は「毛詩補疏」と記して「補」を「輯」に更えている。巻五は

「詩経輯疏」と題する。首に「毛詩補疏」（朱で消す）と題して

「四庫全書提要曰……」とあり、巻頭は、「毛詩補疏」（「補」を

「輯」に訂す）改行して「日南 安井衡 著」、更に改行して

「周南関雎故訓伝第一 国風」、改行一格を低して「周南之国十

一篇三十四章……」と続き、関雎の章へと入つてゆく。行字

数、字面高さは初稿本とほぼ同じく、上欄に訂正搜入句を書す。

全巻に朱句点を施すが訓点はない。

各巻の識語は次に示す通りである。

巻一表紙 再稿明治辛未二月起草（朱）

巻二表紙 明治辛未再稟（朱）

巻三表紙 明治辛未四月再校（朱）

同 首 辛未四月十九日起草（朱）

同 末 五月十八日卒業

巻四表紙 辛未六月再校（朱）

同 首 明治辛未九月十九日起草

巻五表紙 辛未七月起草九月念四校了（朱）

明治辛未七月起草。筆九月十四日校了七八二月多

故感冒不把筆者四十余日故遅緩至此（朱・この

一文朱で刪消）

同 首 辛未七月朔起草時七十三

同 末 此巻七月朔起草三日兎敏雄没於下総千葉既而感

冒累旬九月五日移居於三番衛前後亦倥惣累以故

此日始卒業文明辛未九月念四 息軒

巻六表紙 再稿辛未念五起草

同 首 辛未九月念五起草

巻七表紙 再稿辛未十月廿六日起草

卷八表紙 再稿壬申正月二十七日起草

同 首 壬申正月二十七日起草

卷八 末 壬申三月望前一日卒業

卷九表紙 明治壬申五月再考（朱）

同 首 壬申三月望起草

同 末 明治壬申端午前夕卒業

卷十表紙 再稿明治壬申端午節起草

同 首 明治壬申端午節起草

同 末 明治五年九有梓行予所著孟子定本者時孟子但標

所見於闌上未釐為別冊及取而再考之正其所不至

補其所不足至癸酉十一月脱稿乃復整頓此書十一

月二十七日七十五翁息軒自誌焉

卷十一表紙 再稿癸酉十一月二十九日起草

同 首 癸酉十一月二十九日起草

卷十二首 癸酉十二月十一日起草

古稀を過ぎてから没する二年前ぐらまでの勢いとはとても思

われない程、力のこもった著作である。各葉に自ら丁数を書し、

四十八・四十六・四十九・五十九・五十六・四十一・四十二・

六十二・六十三・六十一・三十・三十六とある。途中、四年七

月三日、敏雄の死に遭って失意の境に悩むことがあったが、足  
かけ三年、平均しても一日約十六七枚書写することになるから、  
大変な精力をつぎこんだものである。上梓の話が最初からある  
わけではない著作にむけるこうした勢意は、まさに真の学問の  
実践にほかならないと言えよう。

次に自筆ではない転写本に就いて分類しておこう。現在安井  
文庫に遺されている六冊を分けると、

(甲)存卷一（国風召南騶虞まで） 初稿本の転写、息軒自筆訂正  
あり。一冊

(乙)存卷二・三（国風邶風芣苢から衛風木瓜まで） 再稿本の転

写、一筆、白文、書き入れなし、二冊

(丙)存卷三・四・五（国風鄘風柏舟から唐風采芣まで） 再稿本

の転写、一筆、薄葉、朱の句点を書き入れる、識語も転写す

る、三冊

という三種類になるだろう。いずれも行字数や字面高さ、また  
全体の大きさも再稿本と同じである。(乙)も(丙)も新しい転写本で  
ある。(甲)は息軒が校正のために浄書せしめたもので、表紙や内  
題など、自筆で記している。

また、以上、再稿本、転写本の全冊に「安井文庫」印を捺し

ている。

「崇文叢書」は、再稿本に依っているが、巻だてが巻一―三までで再稿本と次のように違っている。

巻一 再稿 周南関雎―召南騶虞

崇文 同 周南麟之趾

巻二 再稿 邶風柏風―邶風二子乘舟

崇文 召南鵲巢―召南騶虞

巻三 再稿 邶風柏風―衛風木瓜

崇文 邶風柏風―衛風木瓜

巻四以降は合致する。

### 第三項 礼

礼書に就いては、息軒自ら稿を成したものが遺るわけではなく、子弟によって編纂された息軒の遺説集という性質のものである。即ち、「十三経注疏」に書き込まれた諸家説の引用や自らの按語等をそのまま摘出してまとめたものである。従って息軒の意を得たものとは必ずしも言い難いが、息軒の、あまりにも完成度の高い（というのには、欄外の書き入れが単なる備忘の

メモという性格からあまりにもかけ離れている感の強い）読書に對して、それを学び、伝えようとする人々の熱意によって遺されているのである。

「周礼補疏」と題する写本が三種類、「息軒先生礼記説」と題する写本が一種類である。「周礼補疏」はそれぞれ別手の写本が三冊と寄合書の写本十冊が存するが、別手の三冊は伝来上、一冊の(甲)と二冊の(乙)に分類される。(甲)は首に「周官冢宰」とあり本文から始まり、(乙)は「周礼／飴肥 安井衡著」と題し「周礼注疏序」の補疏から始まり、やや成書に近い形式をとっている。(甲)は「天官」のみ、(乙)は「地官」の「舞師」までといわずれも途中で終わっている写本である。(乙)は第一冊と第二冊が別手であるが内容的には一具のものである。(甲)は十行二十字、字面高さ約十七糎、小字双行。(乙)は十行二十―二十二字、字面高さ約十七糎である。(甲)には朱の句点がある。(乙)は朱の校訂が加えられているが、この字は竹添井々のものであろうと考えられる。竹添井々(大正六―一九一七、七十六歳没)は熊本の人で、息軒の親友木下犀譚の門下であった。外交官としても手腕を発揮したが、後に東大教授ともなって明治の漢学界に影響を与えた。「左氏会箋」を著した。東大の僚友島田篁村(明治三

十一一八九八、六十一歳没)の次男島田翰(大正三二一九一四、三十六歳没、「古文旧書考」の著書)を愛弟子とし、安井朴堂は翰と義兄弟であったこともあり、本書に井々の校訂が加えられて安井家に伝わっているのはゆえなきことではあるまい。

寄合書の写本十冊は薄葉に茶表紙(二十三・五×十五・五糎)を加え、「周礼補疏 一(一十終)」と朴堂の外題が添えられる。

「周礼補疏卷第一/飮肥 安井衡著」と題し、「周礼注疏序」の補疏より始まる。卷十二まで完全で、図も附されているほぼ定稿に近い写本である。十行二十字、十行十八字の二通りの書式が含まれ、字面高さはそれぞれ十七糎、十三糎である。

「息軒先生礼記説」は、門人鈴木正義の編になるもので、この人は「左伝説」も編んでいる。首に「鈴木/蔵書」大印を捺し、書写も大振りの清朗な字である。縹色表紙(二三・五×十六・五糎)に十行の刷野紙を用いている(十八・七×十三・一糎)。「礼記義疏引用姓氏」を首に附し、「息軒先生礼記説卷二」と題し「曲礼上」から始まり卷六までで完全な写本である。每行二十三字で小字双行となっている。首に朴堂の識語がある。

息軒先生礼記説無成書唯十三経本欄上細書之此書獲於坊間  
蓋塾生抄録欄上細書者以成卷也 明治辛亥秋日 康識

ここに息軒の礼に関する著作の大意が示されている。明治四十四年(一九一一年)、朴堂五十四歳の識語である。

以上、礼書数点、全てに「安井文庫」印記が捺されている。

#### 第四項 春秋左氏伝

息軒は、儒学の經典に読書の中心を据えたのであったが、訓詁名物的な考え、事柄の整然とした整理と理解がその読書の本旨であったと思われる。そして、そうした学問的姿勢が培われたのは、父滄洲の教えによる影響も無論大であると言わねばならないが、それとともに、この「春秋左氏伝」という歴史書そのものによる面も大としなければならないように思う。安井家にあつて「左伝」の読書は古く、清武町に所蔵される寛永版の「春秋経伝集解」は、滄洲の旧蔵であるけれども、なかに「朝中」の署名も見え、それが確かであれば滄洲の祖父ということになるから伝来は古い。これには息軒の書き入れも多く、「左伝」習熟の程を伺うことができる。

後年、「皇清経解」を入手してからは、顧炎武「左伝杜解補正」・惠棟「春秋左伝補注」「九経古義」・焦循「春秋左伝補疏」

等に傾注するが、勿論「十三経注疏」の杜預の注、孔穎達の疏、「經典釈文」を主として取り入れたものである。

成稿までに如何ほどの年月を要したものは明らかでないが、著書のなかでは分量からみても最も多いわけで、数回の改稿を繰返しているから相当の時間を費したことであろう。ともかくも慶応三年（一八六七）に彦根藩の尽力で開板されることとなった。費用は千両にもぼったというが、彦根藩も延岡藩（内藤氏）・相馬藩（相馬氏）・上之山藩（松平氏）の援助を得て調達したのであった。当時、彦根藩主は井伊直憲で廃藩後は県知事となっていた。開版直後に、江戸は騒然として明治維新をむかえたわけであるが、終始一貫して息軒の校正に協力したのであった。また、直憲の弟が三計塾に入僚する等、井伊家の息軒に対する敬慕は並々ではなかった。

この辺の事情は、黒木盛幸編「安井息軒書簡集」（昭和六十二年・安井息軒顕彰会）に数通の「左伝」出版に関する手紙が収載されているので一端を知ることができる。

上梓された「左伝輯釈」は二十五卷二十一冊で封面に「春風館蔵板」とあり「井伊ノ氏記」の印を捺し、奥付に「井伊氏蔵版」として発売書林に「山中市兵衛、石塚徳次郎」両名を挙げ

る。首に同治十年（明治四年、一八七二）清の応宝時の序、同年藤原直憲（井伊直憲）の序、同年川田甕江の序、更に明治三年十月の自序、凡例、左伝輯釈総論を附している。版式は双辺で十行二十字、版框十九・四×十三・三糎、白口。句点のみを刻す。彦根藩の成瀬實、澀谷啓が校字に与っている。

稿本は、おそらく最も成書に近いものに属すると思われる初稿とは別本の、自筆のものが清武町に一点十冊、そして安井文庫には、原形に近い自筆の浄書初稿本が九冊、さらにそれを清書させて自ら改訂を加えている再稿のものが十冊、この初稿本とは別本で、清武本をもとにして版下を作成する前段階の清書本に自筆の朱校、若干の搜入が加えられているものが十四冊遺されている。

清武町の成書に近い稿本は、後補のうす茶の表紙（二十三・五×十五・二糎）が安井文庫のものと同じである。この表紙は神田の松雲堂の手によるものではないかと想像するが、朴堂が息軒の全稿本の整理をした際に加えたものであろう。従って、朴堂以後何らかを機にして分蔵されることとなったのであろう。本文共紙の元表紙に「輯釈補写 卷一」と自書がある。次の見返しに次のような説明がある。「原著と補写トハ一二三ノ合印

ニ依テ合セ写スヘシ 原著ニ藍ニテ消シ並ニ〇此ノ如ク輪ヲ引タルハ皆補写ト重複ナリ写入スヘカラス」これによれば「輯釈」には初稿（原著）と別本（補写）があり、二種類作成したもので、その重複を払って整理したのが本稿であろうと察せられる。巻頭題は「春秋経伝補杜輯釈卷一／日南 安井衡著」と記してあるのを、「春秋経」を「左」に正し「補杜」を抹消しているのであつて、本書の題名はなかなか決まらなかったようである。「息姑惠公之長子諡法不尸其位曰隱」／「傳惠公元妃孟子……」と始まつているから、再稿の形とも異つて、完成した現在の形に近いものとなつてゐる。十行二十字、字面高さ約十七糎、十冊二十五巻本で全冊が自筆の稿本である。

順はもどるが初稿本（原著）とも称すべき安井文庫の九冊本は原初の形を遺す十巻本である。朱墨の校訂、本文墨書も全て自筆で、本稿によつて本書の原形はほぼ定まつたと考えてよいだろう。首に総論を加え、「左伝補杜輯釈卷一／安井衡著」と題し、「隱公元年／傳宋武公生仲子仲子生而有文……」と始まる。巻七の表紙に「丁卯（慶応三年）四月八日校了」と自筆の朱書があり、朱筆による校訂は版刻が開始されてからもこうした初稿本にも辿つて続いていたようである。巻一末には「丁卯

四月望始之至十六日校了之 兪益／長倉戴」と朱の識語がみえ、子の謙助も助力に与つていた。十行二十字、字面高さ約十七糎。そして初稿本に改訂を加えた、再稿本とも称すべき十冊本は二十五巻本に仕あげるが、これは、所謂「補写」の別本ではなからう。凡例や総論も原形が成つてゐる。巻十八以降は本文も自筆であるが、それ以前は本文を他人に浄書せしめて、自筆の校正補入を加えている。十行二十字、字面高さ約十九糎（自筆の部分は十七糎）。第一冊元表紙に「学問所改」の墨印があり、幕府の検閲を経たしがある。従つて、「原著」と息軒が呼ぶ「輯釈」の原形は、世が明治とかわらぬ前の成立に係り、いったん成果としてきり上げたものであつた。

なお、前出の初稿本とこの初稿改訂本は、初稿本の「僖公十六年～二十八年」と改訂本の「襄公八年～二十七年」が入れ違つて整本時に誤配してしまつたが、もとに戻せば各々通巻する。さて、そこで原著成つた後にであろうが、大幅に注解を増して別本を作成し、清武本のような稿本を経て、いよいよ井伊氏の好意によつて出版のめども立ったことと相俟つて、版下前段階の浄書本が作られた。今、安井文庫にその巻一・六～八・十三・十五～十六・二十二が欠したものが遺つてゐる。十四冊。



全体が大判で二十七×二十糎。十行二十字、字面高さ十九・五糎。幾人かの寄合書で、息軒自ら、また彦根藩の三氏による朱の校字がなされている。校字識語は次の通りである。

卷十一・十二表紙 己巳三月四日校了（朱・自筆）

卷十四末 己巳十二月三日校畢 澀谷啓（朱）

卷十九末 庚午正月廿九日校畢 澀谷啓謹識（朱）

卷二十三末 三月廿五日 澀谷啓校畢（朱）

卷二十五末 三月廿七日夜校卒業／四月十三日再校卒業

澀谷啓（朱）

いずれも明治二年（一八六九）のことで、明治政府からも出仕を求められ、三計塾の人も百名を越える、多忙な晩年の大業であった。

以上、これら「左伝」の稿本には全て安井文庫印が捺されている。更に、もう一本、前述の門人鈴木正義による息軒説の編纂書

「息軒先生左伝説」が遺されている。「礼記説」と全く同様に鈴木氏が自ら書写して成書したもので、首に「鈴木／蔵書」印を捺している。全冊に裏打や襖紙を加えてあるが、第一冊は縹色表紙で二冊目は茶色表紙。大きさ二十四×十七糎。第一冊は十

行の双边刷罫紙（十九・二×十二・一糎）に二十一字詰で書写し、この罫紙の版心下部に「井ニ堂蔵」とある。二冊目は十行の单边刷罫紙（十八・九×十三糎）に十八字内外で書写する。

全冊が一手で鈴木氏の手によるもので、朱点・上欄に校正を加えている。「安井文庫」「斯道文庫」（長方印）印を捺し、「礼記説」と同様、朴堂が坊間に得たものであろう。鈴木氏は首に「序」を記している。「息軒先生読書、每折中諸説、細書於読本之頭、此左氏伝、亦其一也、予請之、師曰、是但從其所見而書、有説之牴牾者焉、有文之不備者焉、俟考訂以成一篇、未足以視人也、予固請而写之耳、摘題其経伝及注疏者、予所為也 門人鈴木正義誌」息軒はいまだ意を得たものではないと言っているが、「十三経注疏」に記された書き入れを、おして摘録したものであった。「井ニ堂」とあるのは竹添井々に関わるのであるか。

#### 第五項 四書

「四書」は言うまでもなく、「大学・中庸・論語・孟子」を指し、宋の朱熹によって特に重視される経典となったものである。

江戸時代を通じての朱子学全盛の風は、「四書」の流通において夥しい出版物の量と教育上の顕著な効果をもたらしたが、息軒もその例にもれることなく「四書」の講義を行っていた。ただ、息軒は、あくまでも古注学派であって、それらを朱熹の注釈で読むのではなく、「大学・中庸」は漢の鄭玄注（即ち「礼記」中の「大学・中庸」篇における鄭玄の注解）、「論語」は魏何晏の集解、「孟子」は漢趙岐の注を主体としたのである。唐・邢昺の「正義」・皇侃の「論語義疏」はもとより清の考証学からは、翟灏「四書考異」、焦循「孟子正義」・「論語補疏」、劉逢録「論語述何」、方觀旭「論語偶記」等に材を採り、更に荻生徂徠や伊藤仁斎の説も多くとり入れている。とはいえ、息軒は朱熹の注釈も随時援引するのであって、その姿勢はまことに穏当であり、是をもつて解となす、まさに大人の風格をあらわしている著作と言えよう。

「大学・中庸」は門人の松本豊多が息軒の説を整理した「大學說・中庸說」、「論語」は自編の「論語集說」「孟子」も自編の「孟子定本」が遺された。このうち、「学・庸」「孟子」に就いては、終に生前出版されることがなかったが、「論語」は明治五年（一八七二）、旧飢肥藩主伊東氏によって刊刻されたの

であった。その後、明治四十二年（一九〇九）「漢文大系」の第一巻にこれら全てが翻刻された。従って、息軒の著作のうち、最も身近な存在となつて今に流布しているものである。さらに、門人松本豊多は翌明治四十三年・四年の頃に「論語解」「孟子解」「漢文大系四書弁妄」を著して、師息軒の解釈を講述している。

「大學說・中庸說」は比較的伝本が多い。安井文庫に伝わるものは、「学庸說 松本豊多輯並書」と朴堂の外題があり、薄葉に清書したものである。「大学 陸曰鄭云大学者以其記博学可以為政也 / 日南 安井衡 著」と題し、「衡按……」と一格を低し、「大学之道在明明徳……」と始まる。鄭注は中字、諸説は小字双行である。十行二十字、字面高さ約十八糎。末に松本氏の手跋がある。「先師学庸說之著本与戴記諸說載在注疏本欄上未別成書也及多之受業聽二書口講請借其本逐次蒐録別為一本藏之未有所就正也其後与同学山井幹対校頗加考定焉頃者受先師孫小太郎君之囑校写二書乃參諸先師手沢本精意校写如右 明治十九年五月下澣末弟松本豊多謹誌」

ここに山井幹というのは山井清溪を言う。清溪は弘化三年（一八四六）淀藩の内田家に生れ、紀伊西條藩の山井鼎（「七経孟子考文」の著者）の山井家を、後に再興した渡辺璞輔（山井

璞輔)の嗣となった人である。璞輔は松崎慊堂門下で息軒と同門。清溪はまた三計塾の都講ともなった。明治四十年(一九〇七)六十二歳で没した。墓碑銘は安井朴堂の撰になる。後に南葵文庫を創設した徳川頼倫はその門に学んだ。

外に、後の蒐集に係る斯道文庫の蔵書に二種の伝抄本がある。

一は「晚翠楼図書記」印を捺し、「大学／安井衡著」と題し、「大学之道在……」と始まる節略本である。十行二十一字で字面高さ約十八糎。「大学」のみ。一は薄葉の藍色刷野紙(十八・五×十三糎、十行)に毎行十六字、小字双行で写す。「大学」は節略してあり、「中庸」とは別筆である。外題には「大学中庸集説」(尾題もかく作る)とある。「瀧川氏／図書記」印を有する。瀧川君山(「史記会注考証」の著者・昭和二十年六十五歳で没)の印記で、君山は昭和十三年、安井朴堂の墓誌銘を著している。先述の山井清溪と並び、朴堂の親しい友人である。最も原初に近い稿本は松本氏自筆の「学庸補疏 息軒講述」と外題に記す一本で、これは慶応義塾図書館の所蔵。薄葉の藍色刷野紙(十六・八×十二・六糎)十行に二十字小字双行で全冊一筆の本文書写(松本氏の自筆と思われる)に松本氏の朱藍墨三筆による校訂が加えられている。「大学陸田鄭云大学者以其記博学可以為政也」

と題し、朱で「大学」下に「補疏」と補し再び墨抹している。

「日南 安井衡 著」を墨抹し、「息軒安井先生筆記(筆記を朱で講述と訂す) 門人松本豊多筆記」と訂している。「衡按」を「先生云」に訂正し以下此に倣えと。「起筆於辛未七月五日畢於七日」と「大学」首に、「辛未七月十七日卒業 松本豊多写」と「中庸」末に墨書する。辛未は明治四年(一八七一)息軒在世の時である。この稿本は、先に示した安井文庫本松本氏跋に言う所の一本で、校訂には山井清溪の手も加わっているであろう。いずれにせよ、松本氏は晩年の息軒によく学んだ人で、自らの字様も息軒の影響がよくあらわれている。

なお、松本氏には、別に「学庸講資」(明治三十六、四十二年頃成書)なる稿本が伝わっている。同じく慶応義塾図書館蔵。

「論語集説」は明治五年の刊本に、飢肥侯伊東祐相の序と自らの序を添えた。その後外交官柳原氏によって大陸にもたらされ、清の沈秉成が序を寄せた。息軒はその序にはいささか不満であったようだが再び明治七年の自序を附して印行している。首に「何晏集解叙」や皇侃・邢昺等の総説をまとめ、「論語集説卷一／日南 安井衡 著」と題し、「学而第一皇侃云、自学相次、無別科、……」  
「子曰、学而……」と始まる。古注は中字で集説は小字双行。

句点・返点を刻す。双辺有界十行二十字白口、板框十九・一×十三糎。封面に「明治壬申季秋刻成」「嚶嚶舎藏版」とあり奥付に「明治四年十二月十日御届／同五年九月出版」とあり、出版人華族伊東祐帰、発行書肆稲田佐兵衛の名がある。全部で六卷であるが、稿本では二十卷の時もあった。安井文庫所蔵の稿本は、一次稿・二次稿・三次稿・版下前の校訂稿に分類される七冊で、それぞれを甲・乙・丙・丁と便宜上呼んでいる。巻頭題や行字数等の基本は全て刊本と同様の原型ができているが、いずれの稿本も残巻なので整理すると、やや複雑である。丁の稿本には「官許」の大印が捺され、明治政府の出版許可印がみられる。

甲（一次）学而／公治長一冊

季氏／堯曰一冊

二十卷本 卷立未定

自筆稿・句点返点なし・字面高さ十七糎。

乙（二次）先進／衛靈公一冊 卷十一から卷十五とし、二十卷

本

自筆稿・朱句点・字面高さ十七糎

丙（三次）先進／子路一冊 卷十一から卷十三に作り二十卷本・

扉に「四」と墨書。

別筆稿自筆校訂・朱句点・字面高さ十八・五糎

丁（四次）学而／八佾一冊、但し為政・八佾は丙（三次）と同

筆一具の稿本。これと別筆の学而を四次稿として用

いた。六卷本とす。ともに返点を加え、自筆朱校。

字面高さ十八・五糎。

里仁／述而一冊（卷二）

泰伯／郷党一冊（卷三）

六卷本とす。自筆稿自筆朱稿・返点・朱句点・字面

高さ十七糎。

となつている。校正には、ごんべんや草冠など細かな字体にも気を配っている。

「孟子定本」は「漢文大系」で初めて公表されたもので、稿

本は自筆の初稿本と浄書本の二種のみが遺る。最晩年、「左伝」

「論語」「管子」も出版が済み、更に新たな成稿にむけてゆく時

であったが、既に七十五歳を過ぎてからの起筆だから驚くべき

精神力と言わなければならない。宋の朱熹注ではなく後漢の趙

岐注本によるが、「孟子」は古注の伝本が非常に少ない。「十三

経注疏」本は古注によつてはるがかなり原形を損じているので

あつて、やはり頼れるのは清考証学の成果、清焦循の「孟子正

義」であった。本書は古注本文がよく校勘されており、博引傍証の正義は実に穏当な解釈を示し、古今を通じて最も優れた注解書として評価が高い。息軒は日本でいち早くこれを自らのものとしたのであった。この「孟子定本」中にみえる「正義」はみなこの焦氏のを指している。

初稿本は首に趙岐の「孟子題辭」を置き、「孟子趙注補正卷一／日南 安井衡 著」と題し、趙注補正を「定本」に、著を

「訂」に改めている。趙注は中字で、疏文は小字双行で十行二十字。字面高さ十七糎。朱の句点、返点を附す。朱書による訂正は少なしとしないが、かなり完成に近い稿本である。全て自筆に係る。識語は次の通り。

序首 癸酉五月起草

卷三首 癸酉五月念二午後起草

卷四首 六月二十三日起草

卷五首 七月二日未位起草

卷六首 七月十四日起草

卷七首 七月念三未位起草

卷八首 八月二日申位起草

卷九首 癸酉八月二十日起草

卷十首 癸酉八月念七申位起草

卷十一首 癸酉九月二日起草

卷十二首 癸酉九月八日巳位起草

卷十三首 癸酉九月廿八日起草

卷十四首 癸酉十月十一日起草

末 明治癸酉十月念九日卒業此日旧歴重陽投筆对菊小酌亦

近況一快也

更に、八月七日起業、八月十七日卒業などの朴堂による校訂の日付も記されている。また一部に松本豊多氏の校も入っているようである。

浄書本は、全て字句の校正のみであり、あるいは上木に到ろうとする直前のもかと思われる。「漢文大系」編校時よりは早いと感ぜられるが、本文・校正ともに自筆は無く、校正もほぼ字体の正確を期するもののみとなっている。書式は初稿本と同じく、字面高さは十八糎。全巻一手であろうか。墨で返点を附すが、卷八以降は朱筆で附している。息軒生前の浄写か没後のそれかは、にわかには断じ難い。いずれの稿本にも「安井文庫」印を捺す。

## 第六項 戦国策

「戦国策」については既に第三章、息軒の蔵書の第三項、和刻本への書き入れのところで述べた通りであり、この著書である「戦国策補正」は、読書書き入れの延長線上にあるものと考えられる。大正四年（一九一五）「漢文大系」の第十九に安井朴堂の校訂を経て、横田惟孝「戦国策正解」に附して翻刻された。

解説はその朴堂の解題に詳しいが、要は漢の古注に帰するところが息軒の主旨であって、漢高誘注本を主とした清の黄丕烈校刻本に依った注解である。稿本には自筆の初稿本一冊と再稿本二冊が遺されている。内容的には二種とも殆ど変化はなく、部分的な修正に止まっていると言えよう。再稿本も全て自筆で浄書の段階にあり、句点を施しているのが特徴的である。また、巻だてが初稿で巻一・二としていたのを再稿で上・下に改めたものである。「戦国策補正巻一（上）／日南 安井衡 著」と題し、「東周<sup>敬王四年</sup> 伏王城王……」と国名に注を置き、「周之君臣……」と本文が始まり、小字双行で注を附する。十行二十字、字面高

さは十七糶。初稿・再稿いずれも同様の書式である。初稿本の末に「嘉慶癸亥秋呉門黄氏／読未见書齋影摹宋／本重彫」と黄氏校刻本の刊記をうつつし取っている。本書が何時頃の編写に係るかは不明であるが、和刻本への書き入れとの連関で察すれば、中年以降比較的他の著書よりも早い時期ではないかと想像する。

## 第七項 管子

「管子纂註」二十四卷は大正五年（一九一六）小柳司気太の解説をもって「漢文大系」二十一に翻刻され、「管子」を読む者の最良のテキストとなったが、その上木は元治一年（一八六四）息軒六十六歳の時にさかのぼる。すなわち、同年二月一日に序文を書き、三浦五輔（息軒の「及門録」によれば、文久二年へ一八六二）正月及門、伊豫の人、「伍」に作る）に校正を託して、十日奥州塙の代官に命ぜられるというゴタゴタに労を費していた。が、その八月には免官になったため、再び校訂を行い、慶応二年（一八六六）四月、「管子纂註考論」を著し、「管子纂註」に附印することとなった。その後、同治六年（慶応三年）清の応宝時が本書を読んで序文を記していたが、明治

三年（一八七〇）それが上海から伝えられて息軒の目に触れ、上梓からこれまでにつくつていた考異等を応序に刺激されてまとめ、一冊として「管子纂詁補正」を出版した。その「補正」の自序はこの頃の様子をよく示している。「豫人之刻」「管子纂詁」一也、竊謂粗能窺其一斑矣、既而閱之、謬見未除、脱誤又多、嘗一訂其字矣而未暇正其說、耿耿於心者七年、庚午正月清人応宝時「纂詁」之序、伝自上海、過蒙称誉、赧然自慙、至八月、「左伝」「論語」補疏、以次上梓、而「詩」「書」「周官」「国策」之属、亦粗就緒、乃排百冗而再考之、正其謬妄、補其不足、一百一十有四、訂誤脱四十有四、応序所論、取其是、而駁其非、又十有八、凡得二百七十有五條、合之考譌、以附「纂詁」、予考正之力尽於此矣、四方君子、幸助不逮、摘抉其瑕、「管子」一書、庶幾其可誦矣、若夫俗字或体、触処皆是、不可勝訂、姑依原本、明治庚午冬十月望 息軒安井衡 豫人はすなわち三浦五輔である。

慶応一年に上梓された「管子纂詁」は、封面に「慶応元乙丑歳新雕」「江戸書林 玉山党発兌」とあり、元治一年二月の自序、凡例を冠し、「管子卷第一／安井衡 纂詁」「牧民第一也、養経言一」と題し、「凡有地牧民者、務在四一時、令不違時、則百穀殖、……」

と始まる。双辺十行二十字、板框十九・六×十三・二、白口で返点、句点を附す。末に「纂詁考譌小引」（慶応丙寅二年四月）があり、「管子纂詁考譌」八丁を附印する。小引にも言う如く、この「考譌」は誤字の校正が殆どである。更に、斯道文庫本には山城屋佐兵衛の蔵版目録や三都の売りさばき書店名の奥付がついている。また、前述明治三年の序を附した「管子纂詁補正」は、同治六年の応宝時「管子纂詁序」を、匡郭を二重にして半葉八行の野に二十二字詰で六丁、句点つきで刻するという洒落た体裁の版刻で、本文は「管子纂詁補正／日南 安井衡 著」と題して「牧民／注、従祖昆弟又有子、為族祖昆弟、有子下脱為從曾祖昆弟、從曾祖昆弟又有子」という具合にはじまる。全十八丁、双辺十行二十字で版式大きさ等全て「管子纂詁」本書に倣っている。版心下部に、本書にはない「玉山堂」（山城屋の堂号）の三字が刻される。序にも言う如く、この「補正」は訂誤のみでなく、注の説明の不足部分を補ったり、また応宝時が指摘している考異について更に考証を加えているのであって、本場清朝の学者と侃侃諍論じあう文勢は、読者をして迫力満点の境地に入らしむるものである。

さて、こうした経緯をもつ「管子纂詁」の稿本はと言えば、

自筆初稿本と称すべきものが安井文庫に卷十、二十一、清武町に卷一、九、二十二、二十四と分蔵されていて、また自筆ではない浄書本に息軒の自筆校訂が加えられている再稿本と称すべきものが、安井文庫に卷一、六、十四、二十四、清武町に卷七、十三と分蔵されている。更に、「管子纂詁考譌」は自筆稿本が清武町に、「管子纂詁補正」はやはり自筆稿本が安井文庫に遺されている。要するに一堂に会すれば全てが揃うというわけである。

清武本によれば、初稿本の巻頭は、「管子第一 飢肥安井衡 著」「牧民第二<sup>也</sup> 牧養 經言一」と題し、「凡有地牧民者……」とはじまる。朱で「管子卷第一 飢肥 安井衡 纂詁」と訂している。十行二十字、字面高さ約十七糎で朱の句点を施している。安井文庫の残本も全く同様である。清武本には「管子纂詁考譌」七丁が附され、また、巻一の首には「学問所改」の墨印が捺される。すなわち江戸幕府の許可印である。

再稿本は、幾手かの寄合書で朱の句点並びに返点を添えている。巻頭の「飢肥」を朱で「日南」に変えているが結局この「日南」も墨抹して削去することとなった。行字数も版本と同じく、ほぼ版下と称しても可ならんかと思われる稿本である。

字面高さ約十七糎。

これらの稿本のうち、最も手が加えられているのが「管子纂詁補正」で、それには朱墨の増減が夥しく遺され、十七丁の小冊子ながら息軒最晩年の学問にかける勢いを見る思いがする一本である。やや筆力に以前の強さを欠くものの、応宝時の序に答えるべく真摯な考証は、超一流の儒者たる証であると言えよう。字面高さ十七糎、巻頭題も刊本に同じ。

以上全ての稿本に「安井文庫」印が捺される。清武本は後補の表紙も安井文庫のものと同じ、この印記もないから、朴堂が息軒の遺書を整理する以前に別れたものであろうか。

## 第八項 旅行記

息軒と旅行記というテーマについては、「読書余適」の解説（本論集二十三輯）に詳しく述べたので、ここには安井文庫に遺る旅行記類の書誌的解説にとどめておく。

「読書余適」は弘化四年（一八四七）に伊豆・箱根を旅した時のもので、天保十三年（一八四二）の東北旅行記「読書余適」の続編である。十六・六×十一・五糎の小型本に八行十九



字、字面高さ十三糎で記し、朱筆による訂正を加えている。三十七枚。「安井氏紀行集」(黒江一郎編・一九五九年・安井息軒先生顕彰会)に翻刻。「河原氏蔵書」(息軒の弟子、河原順信)「安井文庫」(斯道文庫)(長方印)印を捺す。

「東行日抄」は天保九年(一八三八)、息軒が一家を挙げて清武から江戸移住を行った時の紀行である。十五・四×十一糎の小型本に十一・八×八・五糎の左右双辺七行藍色刷野紙に十五字詰で三十三枚綴ったものである。三十三枚目に字枿をみわけ下敷があるのは有趣である。息軒の原稿は十行二十字の高さ十七糎というのが殆んどであるのは、この例にみる様な下敷を用いて書写していたものと想像されるのである。本書の字勢はやや軟体で、江戸へ出てからの充実しきった時の字とは区別される。前書と同じく「安井氏紀行集」に翻刻される。

「洗痴日乗」は安政三年(一八五六)息軒五十八歳の時、伊香保温泉(群馬県)への紀行を綴った文で、三十四枚の薄葉(十八×十三糎)に八行十八字(字面高さ十三・八糎)の体裁。墨筆で少なからぬ訂正出入がある。「息軒先生遺文集続編」(黒江一郎編・一九五六・安井息軒先生顕彰会)に翻刻される。「河原氏蔵書」「安井文庫」「斯道文庫」(長方印)印を捺す。

「讀書余適」の再稿本は、二十六・五×十八・七糎の大きさに、十一行二十字、字面高さ二十一糎で書写し、朱の校字、藍色の句点を加える。「班竹山房蔵書記」「安井文庫」印を捺す。先に翻刻した初稿本はかえって安井家には伝わらなかった。

「江山余情」(091241)は安井文庫ではなく、後に斯道文庫の収集に係るが、ここに附しておく。安政六年(一八五九)六十一歳時の日光山への旅記で、「息軒先生遺文集続編」に翻刻されている。十五・七×十一糎の小型本。十二×八・七糎の左右双辺八行の刷野紙に二十字内外で書写。十五枚。「河原氏蔵書」印あり。この河原氏旧蔵のものにある外題の墨筆はおそらく河原氏によるものであろう。

「日向記略」は、息軒の郷里、日向の歴史を誌すが、平部嶠南(飢肥藩士、息軒弟子)の著にも同名のものがあるように、日向地方を治めた伊東氏の歴史であるとともに、島津氏との攻防の歴史とも言えるものである。関ヶ原の合戦の勝敗とも相俟って各藩の処遇がとやかくとされるなか、清武城主であった稲津掃部助重政が主君伊東祐慶に切腹を命ぜられる話など、日向には歴史的逸話が多い。息軒の最も好んで学ぶ所であった。おそらく他の史料から息軒自ら写しとったものであろう、全部で十

巻のうち、巻八・九・十のみを存し、元表紙に「日向記略 三」と記すから全三冊のうちの一冊が遺つたものである。二十七×二十糎の大判で十四行の仮名交り文、字面高さが約二十一糎。自ら訂正補入する箇所が少なくない。朴堂の識語があり「息軒先生親筆」と。

## 第九項 随筆

息軒は明治九年（一八七六）九月二十三日七十八歳でこの世を去つた。一生涯、難解な書物を解きほぐし、注解を続け、稿に稿を継ぐ日々をおくるなか、まとまつた随筆の類には時を費すべくもなかつたと言つても過言ではなからう。明治八年、七十七歳で著したカナ交り文の「睡余漫筆」は、まさに絶筆と称すべきものであつた。その序に、

兼好法師カツレツレナルママ机ニ向ヒテ思フコト言サラン  
ハ腹フクルル業ナリト云シハ実ニサル事ニテ已レ七十六歳  
ノ春ヨリ目ヲ病テ物ヲ見ルコト叶ハス起テハ食ヒ食ヒテハ  
臥スコト二年ノ久キヲ経共愈スツレツレノアマリ日ヲ暮シ  
カネテ七十六歳ノ冬思ヒ立テ字行ノ僅カニ見ユルヲタヨリ

トシテ心ト手ニマカセ思出ル事ヲヤタラ書ニカク日数積リ  
テ紙カスモ重ナリケレハ幼ケナキウマ子トモノ心得ノ片ハ  
シトモ成コト有シカトテ聚メテ一卷ノ書トナシ睡余漫筆ト  
名付又詞ニアヤナク章ノツイテモ立タサルハ思出ルママ書  
シ故ナリ尚余命アラハ八年毎ニ書添ルコトモ有シカシ 明治  
八年十一月朔七十七歳翁安井息軒土手三番町三十番地ノ宅  
ニ書ス

と記すように、余命を案じつつ、書き継ぐ意志を持ちながら本編にて擱筆となつた遺著である。安井文庫に遺る自筆稿本は、目の不自由さと老齡の衰勢を如実に見てとれるもので、遺稿としても貴重な資料となっている。内容は経学に限らず、むしろ種々雑多な事柄に得意の訓詁考証学的筆の運びをするものである。全体を三巻に分け、十行、二十字内外の字詰、字面高さ十九糎、九十一枚。

そして自筆稿の外に、この伝抄本が二本あり、一は薄葉に十二行十六字字面高さ十七糎（09B 6 14）、一は十二行二十五字の印刷柘目野紙（十九・五×十三・五糎）に書していて、成章堂から活版印刷されたときの下原稿となつたものである。（09B 6 15）成章堂はかつて「読書余適・睡余漫稿」を出版した書肆で

あるが、「睡余漫筆」の活字本は筆者も目にしたことがない。

さて、「睡余漫筆」には、同名であるが、さかのぼって六一歳、安政六年（一八五九）に漢文で記したものが存在している。昭和十年（一九三五）神田の松雲堂が「松雲堂娛刻書第二」に翻刻したのが即ちこの一本である。その際に翻刻に付された安井朴堂の跋文には次のように記している。

#### 別本睡余漫筆跋

王父所筆睡余漫筆有二本。一国字本凡三卷。曩年成章堂印行者。成於明治七八年之交。一即此本也。安政己未起稿。

所録止十三。則既而中廢。以故不至完成。反字説同於国字本。但微有異同。頃者松雲堂主人獲抄本。乞上梓以頒所識。

乃校訂還之。昭和乙亥五月 安井朝康敬識。（句点は筆者）

安井文庫に伝わるのは伝抄本で薄葉に十行二十字、字面高さ十八糎。朱点・朱の校字が加えられていて、朱は朴堂の字であるから、あるいはこの一本が即ち松雲堂の入手した抄本なのかも知れない。「古文尚書」「詩序」「同年同庚」「国字与東冬部相約」「大学」「流連」「世婦」「享年」「猶子」「徒御不警」「反字」「鳥獸馴人者毛羽必文」「報時鐘」の十三項目。随筆というよりは考証学的な札記と言うべき性質のものであろう。

以上が「睡余漫筆」であって、更に息軒の漢詩を輯めた「睡余漫稿」という稿本が存在している。安井文庫に伝わるのは、「睡余漫稿卷一 安井衡仲平著」と題する自筆稿本で、巻一のみが遺されている。十八枚が自筆で後方七枚は自筆ではない。自筆の部分は左右双辺（十六・八×十一・九糎）十行の刷野紙（白口、無魚尾）に二十字詰で書写し、それ以外の七枚は四周双辺（十七・五×十二・三糎）十行の刷野紙（白口、単魚尾）に二十一字詰で書写している。「班竹山房／蔵書記」「斯道文庫」（長方）「安井文庫」印を捺している。明治三十三年成章堂が「読書余適鈔」とともに活版印刷したが、本稿とはやや出入があり、本稿以外の稿本が伝写されていたものと思われる。

#### 第十項 その他

外題に「弁妄 副本」と朴堂の手によって記された写本一冊（09B 6 16）がある。薄葉（二十六×十八・五糎）に十行二十字、字面高さ十八・五糎で記された一筆の書写で、自筆ではない。キリスト教について記した「弁妄」は全部で五章に分かれ、「与某生論共和政事書」（「息軒遺稿」卷二所収）一篇と「鬼神

論上・下」(同卷一所収)一篇を後に附している。なお、いずれも訓点のない白文で「鬼神論」以外には朱点を加えている。

晩年、明治六年(一八七三・七五歳)に書かれたものであるが、儒者として聖人君子の教えを身に体することが学問を治める者の至上の目標であることを切に願っている姿をうかがうことができる。

また、息軒が最も大切にしたのは、書物や家族でもあり同時に、友人や学友、子弟の諸氏であった。安井文庫に遺る和大小切の横本二冊は、一に「故旧 過訪」と題し、友人や学友を、一に「游従 及門」と題し、子弟の氏名を記した名録である。前者は安政己未六年(一八五九・六十一歳)の序を冠して、翌万延一年までの名録である。後者は主に三計塾に学んだ門人名録で、明治七年(七十六歳)十一月入門の土州 島村于雄まで及んでいる。全部自筆であって、如何に周辺の人々を大切にしながらわかるし、息軒の交友関係を知るうえでも貴重な資料となっている。特に、「故旧」にみえる塩谷右陰・木下犀譚・芳野金陵・藤森弘庵・羽倉簡堂・藤田東湖などの面々は、まさに息軒にとって大きな意味を持つ人々であった。半葉十六行の藍刷野紙(版心に「聿水」とある)(十一・五×十五・五糎)

に実に丁寧に書き込まれている。明治三十年(一八九七)、安井朴堂がこれらを翻刻し、「故旧過訪録・遊徒及門録」と題した。但し、これには及門の明治七年十一月入門の奥州平 宇野敏功以下明治八年、明治九年九月、息軒の逝去直前の名録までを存し、慶応一年の七名をも補録している。

その三計塾の様子に就いては、谷干城がその「干城遺稿」に詳細に記す所である。もともと天保十年(一八三九)四十一歳の時、新進気鋭の儒者として開塾し、「三計塾記」(「息軒遺稿」卷三所収)を著したのであった。「一日之計在朝、一年之計在春、一生之計在少壯之時也」という三計は、塾の方針であるとともに自らが実践した教訓でもあった。爾来、息軒の学問は深く、自信に満ちたものとなって身にあふれいで、子弟の数も増加の一途を辿った。「三計塾学規」はこうした子弟に与えた規律であって、学問は知識のみならずを先ず教えている。十一条からなるもので、修身齊家治国を基とする。常に読書を日課とし、酒色に溺れるべからず、生活にけじめを持ち、立派な人物となって国家の用とならなければならぬ。おそらくは塾に掲げてあったものの塾生による写しであろう。每半葉七行、字面高約二十糎の写本である。

息軒は、自らの人生を振り返る時、大きな時流の変化の中にあって、厳しく生き抜いた学問生活や師友にめぐまれ、家庭にめぐまれた環境などを思い出の主要な部分とするいとまもなかったかのように思われる。とはいえ、それがまた精一杯生きた息軒の生き様であったと見てしまうのも儒者としての息軒を見失ってしまうかのように思われる。ここに遺される「年譜」一冊四枚は明治六年（一八七三・七十五歳）三月に息軒自ら記したと後記にあるものの伝鈔本である。カナ交りで十行、字面高さ十七糎で写された本文は、簡便で、後年の部分が大半を占める。夥しい量の原稿と蔵書が遺つてあればこそ、こうした後年の述懐も意味を持つのである。なお、この「年譜」に就いては町田三郎氏の「安井息軒研究」（「江戸の漢学者たち」一九九八・研文出版所収）に詳細な研究がある。

息軒が最も大切にしたもの一つ、書物に関しては、自ら書目を編むことはなかったが、班竹山房の子弟によって、元治一年（一八六四・六十六歳）に「班竹山房蔵書目」が作られている。茶表紙（二十二×十五糎）に「元治甲子九月改／班竹山房蔵書目」と墨書され、表紙見返に「読書万巻為何事／只見一身不見人」と墨書。左右双辺（十七×十二糎）十行白口の刷野紙

に、一行一点づつ、「皇清学海堂経解」の詳目から始まり、墨付二十五枚、ここにも栞目の下敷がある。「唐本類」「経書類」「子類」「史伝類」「詩文類」「雑書」「写本類」「雑書附落部」「詩鈔之部」「経書附落部」「唐本経書附落」「和本史歴部」に分かれ、勿論完成されたものでもなく、点検目であるが、「附落部」は息軒の自筆である。首に「本姓日下部／氏安井名益字／謙甫号学海」の印記があり、息軒次男謙助のものである。なお、本編は別に翻刻を附する予定である。

最後に三点、息軒の著作に準ずるものとして挙げられるのが、「時務一隅」一冊「宥陰文稿・犀潭文鈔（息軒批評）」一冊「史記考文補注」二冊である。

「時務一隅」は幕末の辺防について述べられた意見書で、後補表紙（二十七×十九糎）の題簽に「原本石幡貞所蔵」と朴堂の墨書があり、薄葉にカナ交りで六十一枚。字面高さ十七糎。一手で朴堂がうつし取らせたものである。石幡貞は石幡東嶽（また謙齋）。明治四年（一八七二）清国に渡り、天津で李鴻章・応宝時に息軒から託された「論語・左伝・管子」を持贈した人。「東嶽文抄」四巻がある。

「宥陰文稿・犀潭文鈔」は塩谷宥陰、木下犀潭の二親友の文

篇に息軒が手批を加えたもので、初稿本「読書余適」に二人が手批を加えたのと同列のものである。朴堂の手識に「祖考評宕陰犀潭之文者昭和八年托松雲堂鈔某氏所藏而藏于家 昭和八年七月 康誌」とあるように、本書は原本の二色刷影印である。単辺十行二十字、板框十九・八×十三・五糎、白口。宕陰文鈔は二巻で十六・十一枚、犀潭文鈔は九枚。自筆批入の原本は今も所在はわからない。

「史記考（校）文補注」と題する稿本二冊は、天保十三年（一八四二）東北に遊行した際、七月二十日に米沢藩上杉家所蔵の宋版「漢書」「史記」を閲覧して思い立った著作である。七月二十日の「読書余適」に「倣山井鼎考文例、精対以為一書、亦藝林一勝事也」と記す如く、「七経孟子考文」が足利学校の宋版を校勘したのに倣いたいと考えたわけである。そういう意味では、息軒の最も意を得た企図であると言っても過言ではないと思われるが、草稿の段階で終えてしまったものである。二冊のうち、第一冊は一次草稿とも言えるもので、「史記集解序」から「五帝本紀」の首まで、訂正が多い。第二冊は二次草稿で、内題に「考文」を「校文」に作り前者を整理し、「始皇本紀」までを存している。毎半葉十行で字面高さ十八糎で全て息軒の

自筆である。用いたテキストは「宋本」「元本」（中統二年本）「震沢王氏本」（宋本の覆刻）「陳繼儒本」「嘉靖本」「汲古閣索隱単行本」「錢氏坊本」（史記評林本）で評林本を底本として校異を記している。「宋本」の説明に、「原本係米沢上杉侯所藏、裴駰叙後有建安黃善夫刊于家塾之敬室之印、弘化中 吾公借觀命写手影抄、臣衡隨而校之、字樣版式毫無差繆、間有殘闕拋狩谷氏所藏黃氏殘本藍字填之、遂成完本」（点は筆者）とある。つまり天保十三年から程なく息軒のすすめで伊東公が影抄本をつくらしめたというのであった。それで校勘ができたわけである。さてその影抄本は何処にか現存しているのであろうか。なお、この米沢本原本は現在佐倉市の歴史民俗博物館に、狩谷掖齋本は遠く北京図書館（一部東京大学）に所蔵されている。以上、この項に述べた全ての伝本に、「安井文庫」印記が捺されている。